[illegible]

F
キ−21

安政丁巳秋

救急撮要方

單

櫻寧室藏刻

慶應義塾大学医学情報センター
月5日
富士川文庫
1694
490.9
Ky-7
No.5050

救急撮要方序

夫舍㆓之適㆒。而求㆓之遐㆒。急㆓之易㆒。而求㆓之難㆒。未㆑有㆓能得者㆒也。姑以㆓吾醫之道㆒言㆑之。前庭之馬勃。可㆔以止㆓出血㆒。後圃之芋梗。可㆔以治㆓蜂螫㆒。竈中黄土之於㆓嘔吐㆒。食塩煖湯之於㆓霍亂㆒。豈非㆓藥方之至近且易者㆒耶。而皆足㆓以救㆑急應㆒㆑卒。則何必求㆓上黨之蓡。當門之麝。至遠且艱之物㆒。然後

爲可乎。矧乃在海隅山陬。荒遠窮僻之地。一旦有暴病卒痾之憂。不知藥物之在目下。愴惶狼狽。拱手待斃。最爲可慨也。曾祖考藍溪先生。宿有憾于斯。著有濟急方一書。祖考桂山先生。纒有救急選方之著。蓋濟急。專便于僻遠之醫乏地。而救急。兼資於留家應急之用。其爲世之鴻益。匪淺焉。但濟急。大卷厚冊。不便于提挈。而救急。復有俗之人。不易曉者。人或病之。隱士默翁。有見于斯。撰成採急撮要方。其書一原本濟急救急二書。且多取捷方之親驗體試者。裒爲小冊子。分門類聚。務歸簡易。蓋其爲物。取之前庭後圃之間。而其爲說。愚夫愚婦可得而曉。於是乎。行者可繫肘後。居

者可秘之枕中其尓
庶幾乎藍溪桂山二
先生之遺意歟。當其
来請予言也。書此還
之。

安政丁巳後五月江
戸丹波元佶棠邉識

濱如穀中書

凡例

一此書ハ素人の急病を救得らるべきことを旨としるせるものなれバ行旅の嚢中やまたハ戍兵の在陣などふところに懐まし。閑隙あるときハ熟讀し豫め是を記得おくべきなり。自己の爲のみならず衆人の病あるときに醫師なきと雖これを治するを得せしめんが爲に薬物もある草方ハして實驗を歴たるものゝ且修治やすきものを擇て載たるなり。故に從前より世に傳るところの救急の書乃徒に夥多の方を羅列するの事あるときハ臨てハ素人の意を以て適從べきところを辨がたきにて此にハのぶる也

一急病の外にも。宿疾の治方婦人小兒の病にいたる迄も。素人の意得て裨益になるべきことハやゝこれを記載するハ。濟世の一助ともなれかしとおもへる。

一方一術といへども。正據なく。確實なるものハ是を洩せり。故にこの編に擧る所ハ中にも世に經驗ありて一方を執てこれを奇方妙藥と稱し秘して妄に傳へざるもの等を盡く之を記せり。故に此編ハ僅々なる一小冊子なれども。よく之に從て急卒の病を療ずるときハ。世の伎拙く心怯なる醫人の。事に臨むときにハ。俗家と倶に狼狽周章してこれを委任がごとき輩よりハ遙に優なる處置を為得べきなり。又醫人といへども朝夕にこれを讀て自得するところあらバ人を救ことも又多かるべき歟。全編悉く實證實諳にして猥雜無益の文ハあへて記さざるを以てなり。

一先師桂山先生の嚴公藍溪先生台命を奉じて廣惠濟急方を撰れし時先師自ら其事を幹ど。乃のち再びその遺漏を拾集て救急捷方を著されてより醫俗救急の書此に於全く備はる。今此編ハ彼二書に載るところ又遺漏せるところも俗間に傳ふる奇方。自己が發明の試驗せしを並擧られども。もとこれ懐中の一小冊子なれバ詳にその同異出典等を記さざるところあり。著者これを恕へ。

一濟急方に藥物考究等の圖を出して丁寧なれども此にハ諸を略せり。此編の説のそれに及ざるものあるハ採て參考べし此編ハいろハを以て部を分ちいへども。再此の廣惠濟急方の目次に效ハず。諸物入九竅を卒暴諸證の中に集め。以下ハ諸證と並擧瘡瘍一門を別にしたるものなるへ人々の急卒の捜索に彼書と參攷するに便宜あらしめんが爲也

卒倒諸證（みなこゝにあつむ）

憤怒て気を失ふ 一丁 三丁
肩脊卒痺 [illegible]
卒暴て暴ふ死るか如くなる 六丁
卒中風 十丁
雷死 [illegible]
打撲にて気絶する 三十二丁
餓て卒ふ倒死する 三十二丁
井戸坑庫の熱気ふ中て卒ふ死る 卅二丁
癲癇 [illegible]
入[illegible]頭眩昏倒 五十二丁
卒暴諸證 ふかゝるるもよろし
齲歯痛 三丁
衂血 三丁
腹痛諸證 四丁
吐乃止このぬる 六丁
歯齦うきさくる 六丁
鼻卒ふ塞りたる数 六丁
蛇の誤て陰戸ふ入る 八丁
小蛇を呑て悶乱 八丁
雀目 九丁
毒害せられたる 九丁
頓死ふわかま死る 六丁
血を吐たる 九丁
茶を喫て睡られぬる 十六丁
脚気衝心 十九丁
卒中風 廿二丁
走馬牙疳 廿二丁
真頭痛 廿五丁
咽喉腫痛 卅四丁
咽へ粢などの噎ふる 卅六丁 六十五丁
上衝つよく昏冒気を失ひる 卅七丁
霍乱 卅七丁
煙ふ咽る 四十七丁
注車船 四十九丁
暑ふ中る 五十二丁
酒ふ酔て昏冒る及灰虫一の酒ふ中る 五十二丁
眼ふ塵砂の入る 五十七丁
耳へ蟲の入る 五十九丁

水に落る時の心得 五十七丁
耳卒に腫痛 五十九丁
食傷 六十丁
呃逆 六十丁
跌仆て舌を咬ぶる 六十丁
焼酒を呑て解ざるに 六十六丁
傷寒時疫感冒の心得 六十二丁
緩慢諸證（ゆるやう[illegible]）
黄胖俗に陂下病といふもの 十五丁
淋病 十六丁
痢病 十六丁
脚気 十九丁
頭痛 廿四丁
遺尿 二十丁
上衝つよきに 廿六丁
毛蝨 四十七丁
毛ぎれ 四十八丁
腰痛 五十二丁
灸報 五十六丁
寸白の病 六十六丁
外傷の類（けがのたぐひ）
犬に咬れる 一丁
鍼を刺て出ざるに 五丁
鍼釘をのみたる 五丁 四十五丁
蜂にさゝれたる 七丁
蛇に咬れる 蛇に纏まる 八丁
竹木刺をとる[illegible] 八丁
毒蟲に螫れる 九丁
肉刺 十八丁
撲眼 廿六丁
猫に咬れる 廿六丁
鼠にかまれたる 廿六丁
蜈蚣に咬れる 卅一丁
咽へ芒刺のたちたるに 卅六丁
打撲閃挫 四十四丁
蜘蛛にかまれたる 四十四丁
湯火傷 四十五丁
壁宮に咬れたる 四十六丁
蝮蛇にかまれたる 四十六丁
ふくれき 四十九丁
小陽魚の刺をさしたる 五十二丁
金刃傷 五十四丁
打撲にて眼珠の突出る 五十七丁
跌仆て舌をかみきる 六十丁
舌を咬断る 六十二丁

舌より血を出る 六十丁
人よこのまれざる 六十五丁
擦傷 六十七丁
横死の葬 やまひなくてしぬる
雷震死 卅八丁
打撲して氣絶しぬる 卅二丁
縊死ぬる 四十二丁
溺死ぬる 五十八丁
凍死ぬる及凍て起る諸證 五十丁
諸物中毒 もろもろのどくにあたりたる
芋の毒に中る 二丁
糯を食て腹はりぬる 八丁
鯛鯉魚の毒に中る 二十丁
蟹の毒に中る 二十丁
蟹と柿とを合食て毒に中る 廿一丁
礜石の毒に中る 廿二丁
煙草に醉る 廿二丁
煙草のけぶりに噎る 廿二丁
章魚にあたりたる 廿三丁
竹笋に中る 廿四丁
蕎麥に中る 廿四丁
蚰蜒と烟草の脂と合て大毒となるを解す 四十七丁
河豚魚の毒に中る 四十八丁
阿片の毒に中れる 五十二丁
菌の毒に中る 五十六丁
砒霜の毒に中る 六十五丁
婦人諸證 をんなのやまひ
産後に冷水を喫て昏眩て死るを防く 卅七丁
崩漏 廿七丁 帯下 五十丁
小児急證 こどものにはかのやまひ
乳を吐き大便を下す 十五丁
瘡瘍の類 さまざまのできもの
馬脾風 六丁 卅六丁
撮口 七丁
陰癬の妙灸 二丁
陰囊濕痒 二丁
陰門を擦傷る 三丁
疔瘡 三丁

瘭疽（十七丁）　痔疾（十四丁）
雁瘡（十九丁）　便毒（廿一丁）
下疳瘡（四十八丁）　重舌（四十四丁）
舌に瘡を生じたる（五十二丁）　癜風（六十二丁）
肥前瘡（五十一丁）

これその大槩なり。その撰述る。素より急卒の用に供んがためなれバなれど。もし危急の時に臨で卒にこれを捜索んとせば。おそらくハ譫ていそゆる紙をくる人を索へ縄の失なきにしもあらざれ。ゆゑに平居無事の時に終篇をよくよみおきなバ。このぶみこれを記得。その例て病苦をまぬかるものゝ多からんことを庶幾なり

安政四丁巳歳夏閏五月

蘿華舡人識

救急撮要方

い 憤怒をおこして卒に失氣死なるごとくになることあり。これ血氣上逆て経にあり。○のちの部に當着死とあるが。あやまりおちつれて死ぬるを救ところの像に出したる肩を揑る法の術にて多くハ甦るなり。○いき出て後に肩を強て上撫法よくバ。○又肩を刺角子を抱て血を多くとりぬるがよし。○或ハ内部上部の條に初しるす瀉下大黄などを用て軽く下しぬるも又よし。▲犬に咬されて病となるその図とさとられバどれを治するとも効なきがゆゑに。かならずそのことをとらふべし。そべて人の天然とれハ天稟ひとつかはしく。犬は歯をいたむ事あり。然るに犬の咬たる創口に歯の涎唾がのこりてそれが人の血脈に流しそのひろがりてつひに狂林にもされ犬のやまひして乳をはるやうになり。て死ぬるなり田舎にけるぞれをうくるなり

ざら人あれバ後の患ハなきをもすれバ。犬ニ咬ミたらバはやく血を搾りてのち。冷水をもつてよくあらひて血が止りたらバ。犬の歯乃あたりたるところをとつくと見れバ。疵のところハ。白き苔わりのごときものが肉へくひこみてあるをよくきれるかミそりにて。そのところをそくとかきおとしてのち。きつく血をしぼりてふくびあるそあらへバ。ぞくいされて後の患をまぬかるゝなり。されど是ハうち捨ておくかよくせねバ毒気のちのちとあるおそれあれバかまれて跡をさぎるゝハ。そのあと又鐡火をあかく焼く火をつくるか鐵炮の火薬をあてゝつゐつけそのやきおろして毒をたやすか又ハふくろぐさを七八壮もすゆるか。又人の屎をぬりてその上より灸するハ猶よし。もし村などできまで口いえがたきるハ。そのきずぐちをよくきりて。血をいだしてのち巴豆と葛上亭長丸細末を油と蠟とにて加へあはせねりてつけおきして毒をさそひいだすべし。もし日をへて後ならバ。番木鼈子二匁。大黄一匁を一貼として。水一合入て煎せんじ二三貼も用ゆるか。又ハ細末して一匁づゝ用ゆれバ。周身に麻痺を發してのち下利して治するなり。犬のやまひなほるまでにちかよらせバ。井戸など又つぼへ躍りしてかくめかるへ。歯のねのあきぬ程に成治る。水を百四五十ぱいもうつべし。又まてるにてへ斑猫を用る方あれど。大きにあやまり効あることなし。

△芋をくらひて毒にあたるものハ生姜のしぼり汁を砂糖湯に辛味ま入てあつきどさせてのむべし

△陰蝨あるものハ掻破して痒つのり。堪がたきあり。此病ハ脂肪のうちに毒ありて侵播ゆくものなればみづからする綿薬どうして毒気内攻して早くの病に変じ。起かゝることも出来れバ。そのひろ

いつるべきことなり。されど。旅行又ハ在陣中などにてハ。さしあたり困眠することあれバ。後の害なくしてこれを治すべき灸をつたへん。それハ脊骨の節を。ゆびさきにてさぐりそれバ。下のかたより七ッめの骨あり俗にかめのおとしといふなり。此處をもぐさいそのかみにすゑて灸すべし。灸ハ壮ず。七日のあいだすへバかならずいゆるすゑそこらへすゑてよろしく日々とも灸しておこたりなくすれバ。貼薬内服剤を用ゐずにおよべバ痔の害すくいゆること妙なり。この灸ハ痔疾の腫痛痔漏の愈るものこれも薬にまさる効あるものなり。泄浮の生ずるもの疝氣をさかく又ハ労證などにも灸をば効ありてひかえず。おそるべきことなりハおかし▲陰疝あり。このうちにハ孫のいふ路旁に生ずる菜其ものあり葉を採水に煎じてあらひて車前葉またハ菊の茎葉を用ひるもよし。ほくとハ蒲黄あるひハ火葉に用る硫黄花。薬舗にある類をつけるもよし▲陰所に蝨を生ずるハ俗にいふ後軽粉をふりかけてよし▲陰門を癢あるいハ烏賊魚骨又ハ鶏卵殻を細末にして鶏子白にてねりあはせ付てよし

[は] 肩脊卒痺ハ旁にたりて家盆ぞとうちくは。肩のそりつめる所をうきやぶりて血をおろしたるべし。ひたりにて。血のむねにまとまる故ハ。そのまゝ死ぬるものなれバ速にてよしとすべしそれを求めと一命なりそのうち中おちつけてる時下剤を用て下して此證ハあり多くふくさくと見ちあちち。ころ、そのまゝ死ぬることはなれバ。まをやうなかくされバ救ことかるなり▲歯の痛ハさまざま別あれど。詳なるハこゝに記さず。齲歯痛にハ菜蕨の表わり汁。又ハ蕺菜をあらしてその汁を痛所へ

しぼりのくるもよし。丁子をかんでふくむもよし。薤白をもりて頬へぬれバ。細疱を発して痛いゆるやうになる故に。痛つる所にハいかずをとれ銀十匁をりとうきくのばし。水に煎じてふくむべし。呑べからず。又ハ龍脳の細末を酢にとき其ふくむもよし。是ハのみてもくるしからず。それらにてもいたみやまぬ時にハ。龍脳四厘阿片二厘を酒にてねりあはせ齲歯の上にさしこむべし。これハとけてへらバ又さしこむべし。のむべからず。又ハ硇砂の塊五分ばかりを挿るもよし。▲衂血ハ気血有餘のものハ。あながちにとむるハわろきものぞ。されど途中などにて多く出て止ざる時ハ冷水を鼻より吸入て。口へ吐出すことたび〳〵すべし。驛里近くハ薬舗にて枯礬三四匁ばかりを買て厳醋五六勺へとき合せ。鼻の中へ竹の管にてふきこむべし。又ハ枯礬を醋にとかし入べく。綿もしくハ撒綿絲あるひハ揉る紙に浸て鼻孔へさしこむべし。○枯礬なけれバ生明礬を細末して用ゆよし。○擲耳[illegible]の類ハ金創一切の血を止るにしるしあるものなれバ。旅行陣中などにハかならず蓄べき物なれバかねてハよろしく[illegible]。これハ醋の枯礬を浸て鼻孔へ挿とゞむもよし。上へハ冷水をあびせかけ。両脚ハ湯にて温るもよし。▲腹痛とにかく[illegible]なり。ときどき口中[illegible]まり面色青黄ばみ脣紅ならず。食にむかへバ。むねぐろわくする。これらの證あるものハ。多くハ蚘虫なり。かゝる時にハ[illegible]なども[illegible]痛くたへがたくあるバ。甘草四匁をさらりとせんじ。それに甘草の細末二匁ばかり。好蜂蜜を加へかきたてゝ服すべし。是ハ蚘を驅る為なれバかならず蟲を[illegible]乃

とあり。平常蚘蟲の患あるもの。もし旅行陣屋づめなどさんにハ朝倉山椒を細末し。丸薬として日々多く用ゆるか又ハ塩を加へて炒りたるを朝夕まくらもとにおくもよし。よく蚘蟲を治るものなり。榧の實ハ蚘蟲條蟲を治する効あるものなり七日が間一切の食をたちてこれをのむときハ蟲ハ悉く死てくだるなり。鷓胡菜湯ハ蟲を驅るのなり。その方ハ鷓胡菜一匁六分苦楝根皮八分。大黄蒲黄おの〳〵三分これ一服のめあぐるなり。波斯鶴虱の効ハ鷓胡菜にまさされども和ハ偽雜多けれバ真なる物を撰て用ひハ頗効あるものなりさて腹痛の元よりおこりときにやむもの虫の痛ふおしても大便の腸中よどみ居てより痛をなすものなりこれハ下しぐすりあるなり。又腰脚冷。腹しく〳〵痛て下利あるの冷腹なれバ臍中までおこらバ乾姜の細末に砂糖を等分にあわせを朝夕にあわせ用ゆよし。胡椒の末も又効ありそれにても効なけれバ附子剤を用ゆるもの。又腹よへのふいきたて何のゆゑともわからぬ。小茴香一匁六分甘草大黄各三のく六分を合せ生姜三片を入て。せんじ用べし

▲鍼ハ肉ふさし。されて出ざるおハ衛矛の實を二匁ぐろ煎じてのむべし。松葉の黒焼ハよく肉刺を出すものなれどおすりふまぜてつけ。老人ハこれをこのまじめども實ニ驗てその効を知るものハわづかなりしむかしの方と。征古名將の秘藏しものひしものなり。その方ハ蟷螂和名「いぼむしり」又「かまきり」關東にて「かまぎつちよう」と云蟲を三ツとり生ながら紙袋に別々に入て乾ころし。蝸牛一ツ皮をさり牛の蠅三ツこれも陰干にしておなじく細末にして。用るとき飯糊に油をまぜ入るなり。矢の鏃にふれてでざるにつけよ

上へ塗かけおくべし。一方に蟷螂をに巴豆半箇入わりこみて用るなり。もやうし揃の備子の実と松葉霜。一切のとげぬきに用るなり。蟷螂ハ鐵を吸取の効あるなり。蘓鐵葉を煎じて服すべし。鐵とさしたるものに効ありと云も。鐵鏃に効あるものなるべし▲鐵をあやまりて呑たるが咽に入てぬけざるに蟇蝦蟇の頭をきりおとし。胴より生血を呑すること一盃ばかり咽へそろ〳〵と。さらしこめば。中なるつかへくだりて鐵軟に服て出るなり▲土の虫のめるみち。土めのよき地をえらバ。その地を一尺四方ばかりほりて新汲水をいれてかきまぜてしばらくおきてそのうはずみを汲とり。[illegible]湯となし。生姜のしぼり汁十四五滴にて用べし。これを土将水といふにまぜるなどすり。土のそこよりぬきとるなるべ竈中黄土といふてふるきかまどの下の

真赤にやけたる土を。薬舗に伏龍肝とよぶ。その土細末を水にかきまぜ上清をとり煎じて用るも又よし。これにも生姜の搾汁を入る。諸病ともに止り。のむるものに用て効あるなり。又水にて半夏一味を煎じもちひるハ。やすくよし。▲歯齦うきてくづるものはろやむには。鹿角霜（薬店にあり）を志ねりよぬりつけてよし。又ハ五倍子の末に。炭の末を等分にあはせ。塩を少し加てぬるもよし。無花果を煎じてふくむる。又へちまの葉をつけてもすくよし▲蜂に螫るハ。生の芋梗をきりたるを来てつけ。擦としても忽いゆる也。生の芋梗なきときハ。かわきたるをしめしてもちふべし。生芋も又代用ゆべし。やきはりの刺をぬき蠟燭に火をつけて流涙をおとしさむれば又小便をそゝぎてひての歯垢をつけるもよし▲鼻衄

はふさがりてきかずバ管にて竜脳の細末を吹こむべし。又ハ細辛。皂莢の細末。もしくハ嚏草木藜蘆など又ハ瓜蒂の末を吹入べし。それらの類も得ざるときハ紙條を鼻へさし込て嚔をさそふべし◆馬脾風といふハ小兒にある病なり次の乃部咽痛の條に記するところをみるべし

に　暴に死するものゆゑしれず知らざるときハ中毒なるものあり。ほのちの字の部にはし卒ものゝ條をみるべし。聲出ることなくたゞ精神ばかりあるときハ菜菔と生姜のしぼり汁を等分にあハせ少しづゝきりに呑すべし息をのぞくて臍の下へとゞくほどにして。しづかに坐て居まへ。おのづからいゆるなり。されど總じてかゝるものハつねの養生に心を注ぐれバ卒厥などのおそれなきものなれバつゝしむべし

は　撮口ハ初生小兒の病にて。そのはじめハしきりに啼なくしも漸に声出ず氣息促くなりやがて口を撮てひらかざれバ。これをつぼくちともいふに急卒なる大病なれバとかくあやうしに手足冷て死ぬるもの多し。むづかしきなりまづ歯齦の内外をうかゞふべし。粟粒のごとく丸く或ハ酸漿の如き血疱がいくつも出來てあるそれを爪又ハ鍼にて破りて血をのごふべし。硼砂の細末五分に極製なる辰砂二分。硇砂一分をよくまぜあはせ筆のさきにてつけ。又やく紫圓をあたへてもよし。あとで下すべし。又ある人家に貰ひ得らるゝにて用ゆるが口内咽頭へつきてあれバふさがりて乳を吸をあたはずして死する小兒もあれバ小兒にハこの病を心にとめて芥子粒のごときをのまして臍風撮口などにも一次に五十粒程づゝも咽へつまみて湯をそゝぐれバ通じよくのむものなりさてその撮口なども一日夜に芥子の大さなるを三

百粒ものませくだされバ危急を救ふよたびさつくはうにおぼえおくべし煎茶ニハ一味の甘草湯を用ひてよし

へ 瘭疽代指とて手の指のさきわるく腫て痛つよくなやむものなり最初その痛の強きものハ。金銀花小茴香等分にしてよくせんじるを以てよく蒸温めよく後に胡麻油に蠟を入れ煮て膏薬を拵りへそれをつけてよし。又其重きものハ小刀にて切りてそれらのくさりみてハ治しがたしいかにとなれバ。病の甚しきハ毒気増長して命を失ふにいたる容易からぬ事なるを以て。最初の痛の強きときより早くもし痛堪がたく。熱あるものハ少しも早く良醫を撰ミこれを委任べき也初めハ軽率にして此にいふ治療を用ひざれバ。泥して不治のものあり

▲蛇ニ咬れたるにハ創口の血をしぼり出して烟草の脂を塗つくべし蛇ニ咬れて目眩熱出て悩むにハ烟草の脂に明礬の細末を合せ丸じてのますべし。一方ニ明礬四匁甘草二匁を細末して用ゐる。これも又試べし。田家などにハ蛇女の陰戸へ入て悩事あるときハ其ハみだりに引出さんとすべからず。蛇の鱗さかしまにかゝりて出ざれバ。加樣のものゝ出る時ハ手にて尾をとらへて小刀にてもさして置つゝ早く烟草の脂をその刺たる所へ塗べし。蛇死ぬれバ。おのづから出る。また蛇ハ烟草の脂を怖るゝ事甚しくわづかに芥子ほどを口へへても忽ちに悶苦して死ぬるときけバ。尾をさきて蜀椒を入ておけバ出るといふ。又誤て小蛇を呑て悶乱して死んとせしものに蘘荷を煎じて服せしかバ速に治したるためしあり蘘荷も又蛇の怖るゝものなれバ。枯柿もて同効これらのものも脂を用てさすくらいよしとするべし

▲蛇ニ繞

出しバ多く人をして小便を止るけさ。されバしもやもすめらるといふ也。まつも烟草のやに。又ハ烟草灰をとかしてのましむべし△精汁の洩るゝなどに乾したる茶を多くつくりて腹のうちへそゝぐ。誤りて鍼をのむハ猪の油を服べし さ 竹木刺まハ衛芥子松葉焼存性などを用てよし。一方に松葉と鳳仙花の茎葉子とも等分に焼るを細末して井花水にて鍼刺魚骨哽を治ることにハこれも又用ゆべし。又魚骨鯁にハ飴糖を粉團ほどに丸じて呑べし。又ハ硇砂の末を舌の上へのせて解をまちて嚥下すもよし。又播五箇の竹のおちたるが味噌汁などへ入るを誤て呑たるハ腹痛むときハこれも竹木刺の薬を内服てよし△雀目ハ眼球の膜へ水気の上ごとりたるにてこれハすべて浅の水腫の治法をもちえて治するなれバ速に癒るの也。専の蒼朮の佳品をくゝ佐倍蒼朮一味に細末して

用いべし。茎よりハ鱓膽を用てよし。膽ハ鱓の腸のうちにありて小さくふくろありて中に苦き水あり。これをとりて鍼にてさし膽汁をあつめし。それを目におとすといへるにも大きくべし。又鱓膽を内服するもことに大著のくろやきを飲よりてそのあとよりふいて雀目なることありこれより熱ある水あれバ。眼を射て膜中へ侵入るゆゑなど。いふべし也。この病ハすべて小便の通しあしくなくなれバ速にいゆるもの也△毒虫をもてまで。いたむる毒虫の螫せるハ。ちまへの血をあがりぬしかいのをおくるにそよくあらひたるのちに歯鉛をつける又ハ蛇しんまるもき蠟燭の油つきよる火をつけて油をたらしてのむべし。蠟燭涙をゆかしうらするもよし。鶏冠雄黄の細末をつけるも又よし△毒害をきたといふことを覚らバ速に油をのむべし。胡麻の油。菜子油。荏油などをも拘ることなし。砒霜礜石斑猫の

なる毒なりとも。疾くこれを一二合に用れば。よくその毒を抱摂とハ敵を縛ることなるがごとく決して害をあたへしめざる故にこれを記得せバ已が身の禍をまぬがれ人を救ふもやすることなるべきなり。近来和蘭醫学世に行ハれてより未熟の庸工どもが妄に阿片曼陀羅花葉番木鼈子などの麻剤などを誤用て人を損ふもの多し。それらの類ハそれぐの毒を解する[illegible]速に油を用れバ死ぬるまでにハいたらぬなり。世に甘草ハ諸薬の毒を解すといへども毒のみにて拵きものにハさものなれど劇き毒にハ効なし。すべて人乳および無花果の生汁ハ一切の毒を解すといへバ何れにハ用てよし

▲頓死ハ前の卒に死る條にて見るべし

ち 血を吐るにハさまぐのちがひあり。吐る血の色黯黒なるものハ凝結て切りたるの如くなるものこれハ胃府より飲食を受納る囊より溢て出るものなれバ飯粒などハ粘稠なる凝飲などを混じてなるものなりこれハ治しやすし。色赤くして泡沫立なる血ハ肺蔵より気息の出入して生命を保ところの囊の破れるより出るものなれバ少しといへども治しやすからぬもの肺蔵より出る吐血も肺蔵の中に留滞なるものが出るときハ凝結て黯紫色なるものて出るハ疎脆なるもて胃府より出るものとおもふる是どこれにハ線状の如きものがまじりてあれバ混ざるものにあらず。そのさきとほりと名る。二道の吐血ハさまぐの起因ハ何れとも胃より出る吐血なるがまづおこりて嘔気のおこらぬさきにてみぞおちに泥滞やまえ薬ハおもふべからん。醫旅などにて用べきゝ薬なくバ前のこの部にいづる吐を止る奇将水竈心土水などを用ひまする赤石脂の末などを熱湯にかきたてゝ用ひるどして。吐気おちつきたらバ。三黄湯などを用て下しするがよし。三黄湯ハ唐の

大黄一匁二分黄連唐黄芩各六分を一貼とし。沸たちたらそのまゝ火よりおろし。滓をこして用べし。又ハ大黄一匁二分桂枝桃仁芒消各六分甘草二分五味合せて三匁二分を一貼とし。生姜を多く加へて煎じもちふ。これを桃核承気湯といふ。治法ハさま〴〵の違ど。羇旅などにてハこれらにて事足ぬべし。右の吐血ハ多くハ酒客になれバ。たとひ治し得て[illegible]ハ酒を呑べからず。再發しては死ぬるもの多ければなり。又肺臓より出る吐血も。はじめハまづ土漿水またハ新汲水などを用るがよけれど。再大に吐ときハ。ふいに死するものなれバ。痰などにて用べき手当もなくバ。焼塩を細末にして新汲水にて用べし。焼塩なくバ。常の塩を炒て末にして用るがよし。又ハ坩をうちくだきたるを十匁ぞろ水にて煎じたる汁に枯礬の細末二三匁に砂糖を入てきまぜ冷して用べし。あるひハ麒麟血一匁や明礬三匁を末にして砂糖とまぜれど。に加へ新汲水にて用るハいかにもよし。それより治の手あてに二途のなかれ[illegible]廣東人參三匁を一貼とし濃煎[illegible]童子の小便を三勺づゝ入て。つゞけてのまするとよし。三黄湯に硝石なくハ芒消を入て用るも。竹葉石膏湯麥門冬湯などをもちゆるなどの差別あり。これを詳に記しうとも素人にハ領解なりがたきことなれバくはしくいはず。又ハ生地黄[illegible]。[illegible]地黄の汁をとりて用るハ。なれの證にもよろしけれバ。あるバ多く用べし。

△疔瘡毒人として發起その中にかゝれ死るものあり。それと卒中風などゝいふて其侭にして檢もなくハ。歎かしきことゝなれバ。その事を記して衆人に示べし。疔瘡の最初ハからだの小粟粒の如くにてちいさくして。その内にふるき[illegible]

痛もなければ。その人もんづかず。それが
ふとおもはず膿てうちやぶれば痛をおぼゆ
る。又わづか少しとて抓破てより大小
いたみを發する。これよりこの疔瘡の初
發ハ小さなれども。よくしをきハその痛よりは
髮結つよく。或ハその一部のミ不仁であ
がんぎまるあるひハ寒熱はげしく。傷
寒のごとくなるもあり。又ハ胸腹に
動悸つよく鬱冒眩運し[illegible]
しバらくの後。他病はやまれやすく。
それ迄もなくぬるうちに気を失ひて
死るがごとくなるもあれバよく〳〵こゝろ
えて検べし。すべて此瘡ハ頭面口吻耳
鼻手足の關節などのうちに肉薄
く骨に近き所にあるハ発て皮表へ出やす
からず。是は肉攻するを要すれバ捷
疾にこれを發散さするを第一とすべし。
瘡の下を刺て悪血をとるべきなれども
まづかくハ蛭を二三十とりて瘡の
中央より外のかたへつけて血を吸せ
ましむるに血を吸とりたらバ其あとへかの
の葛上亭長といふものゝ細末を。（げんせいの葉 居するもの也）
これを芫菁といへど。芫菁ハ斑蝥の一種にて同じからず
[illegible]
胡麻油に白蠟をとかしたるを[illegible]の
まろくするほど入てねり。その跡へぬり
つくべし。已そのものなくバ。巴豆を四五粒
研するに油をさし加へてつくべし。これに
て毒を誘出すなりさて瘡のまはりへハ
代赭石の細末を醋に糊をいさゝかくハへて
煉るを瘡より一寸ほどはなれてぬり
おくべし。これにて毒をおさへちらさず
とかくいまるとき。此證の最初悪寒つ
よく脈沈で微に力なくバ麻黄附子細
辛湯とつかひてその汗をとるべし。
そのかたハ。唐の麻黄 細辛 各一匁五分 唐の
附子一匁を一貼とし。水一合五勺入て六勺に
せんじとりかぶりて汗をとる。藥ハ一服余
ればさしつかへバ又用べし。唐附子ゑらき

ときハ白川附子。又ハ烏頭を代用てよし。稀粥かあるひハあつき物をくらひて身をのべてより汗出るやうにするなり。もし脉沈ずれして熱のつよからバ硼砂を五分ばかり石灰とあはせて嚴醋の中へ入てそれに熱湯を多くさしいるを用ひ。汗をとるがよし。疔毒を誘發して根を抜に外臺秘要にハ斑猫を貼ることいへり。斑猫も葛上亭長と其功用ハ同じ。ゆゑにもちひてよき物なれど多くあるものにあらねバ葛上亭長を用てよし。これハ根の出る迄ハ貼おくなり。これをつけかゆると疼痛なく久がりてなりならバ出るまでよしとおもふべし。其の節ハ肉腹脊刺旅菜もさすぐれの迄上。初發の内攻せんとする危急病をもふべきことのさかんなる。又疔毒の赤絲血絲とひくを紅絲疔といふ手に生じたるハ腕にいたり。面に生じたるハ咽喉にいたる。その胸にふれ喉にいるものハ嘔逆し悶乱して死にいたる。怖しき病ゆゑにこの血絲發するものハ速かに絲の延ゆくさきをこえて二三分計を離して絲のうへより深さ一分ばかりも刺て血を採るべし。服藥ハ上にいふが如し。又疔瘡に鍼さすべからず。蝸牛を殻ともに搗き紙にのべてつくるなり。

▲中風のうちへハ癱といひ瘓ハ一方の疾と云て右か左か一方が麻木不遂になる病也。おのれにかゝるものあれどもうたがふべき幾その幾ハ自身にむかひて其迹ハわするまで覚悟あるべきなりその幾のあるものあれバ旅行在陣などにおいても隠めしといへバとかく居動自由ならざるゆゑなるべく文字をかゝんとすれば筆つまづく。指さきがれく物をとりおとすことあり。舌をもつれ強て言語艱渋飯粒より浅いぞ又ハものをつかみやまくまうぬ退乱し下剤を用ても大便通じがたきが

又ハ小便頻數なりまたハ小便も付バ。いづれも遠ざかくて邪氣いまだ淺きとなり。かゝる證候のうちぢ。二盤も三盤も灸をかゝらバ。此病の幾まハいのちぬきと心づかそ。飲食を節よく減して酒をかたく禁じ。房慾をさけて。つとめて身體を運動し。一切ハ心を労することハ省てなるべけれ。ともかくして養生を專にすべし。項より尾骶骨にいたるまで脊椎の兩旁推骨につきたる所の窪なる左右相去こと曲尺ふて一寸四五分なる所を項より臼盤左右二ヶ所づゝ灸すれバ尾骶骨の上ふおよぶまで。凡三十日ばかりふてとゞる。俗ふこれを梯子灸とて遠からの灸とくすべし。日ごとに灸ることの又ハ大椎骨乃四方の陥なるところ。七。九。十一。腰眼。腰柱。八髎。臍の兩傍の天樞。あるひハ脇の章門などをえらぶくもよくて大灸ハ小豆などとする。食ひて膏粱油膩の品を禁じ餌食ふ蓴菜。白芥子。生姜。辣茄。蜀椒。葱白。韮。薤白なとの類を用べし。古人この病を陶器ふ劈痕のあるにたとへ。凡一裂破てハこれを接續しても裂ハ素ふ復しのぎがたし。一度發したるハよく治し得ても再發するものなきゆゑに。幾たびもよくつゝしミておこたらぬやうにすべき也。此病の根元ハさま〴〵ありて。治法も大ふ差別ありて。附子。人參ふ宜きものも。大黄。芒硝の類を用て治すべきもあり。その他の藥物をもちひて効ある物もあり。一途ふハいひがたし。此ハ記さゞる也

▲痔疾にかゝるもの。療治して疾おこり線をやむあるバ。このみてからき下剤などを日ゞふ用て大便の燥結なきやうにして。胡麻の油一合ふ。白蠟夏ハ四十匁冬ハ廿五匁をくハへ。火ふ融して浮白を純搯。もしくハ樟腦二十匁を相和して。腫る

下へぬきいバ速にいゆるなり。もし腫痛て堪がたくバ。いの部陰癬の條にいづる。尾骶骨の灸をすべし。次に痛ところぶち愈ると妙也。此證ハ蟲劑すさハ恣意なる附藥などをして迷ふいやさんとして眞の治法に從ふをみれバ。遂に内攻して變じて眼病となるあり。耳聾となるあり。癇疝気ともなり。痱脚痺ともなりゆく〳〵労瘵不治の證ともなりぬるはいづるものゝやうなれバ。心のねてよりそのあつかひかるべきことゝ見ゆる。痔疾の血がとまりて瀉出するものが。さかりて出ぬやうになり。それより肛門腫痛脱肛して馬乗のものも乘ところをして悩めのハ。せむるハ路旁に生る蕺菜を多く刈採てよく布につゝみ熱湯にて煮たりよく蒸べし。いたみつよくバ苦薏花忍冬金銀花の花にても用てよし。又ハそれらの類に枳實小茴香などを加へなるもよし。貼藥にハ。前の龍脳の入る油藥を用べし。のちに按入ても收らざるものハ。蛭をもとめて肛門の輪縁の腫て堅ところに輪轉をさするなるを四五分ある臀肉のはしまでに繋を五六十もつけ。飽てのちをそのまゝそこへなるとそれに布を熱湯にひたしてあてげに吸たる口より血出て。布にそまるなり。それが出やすくするなりよくつゝみてよくすべし。のちに收べき納まりなし。痔疾にて廁に出かるゝまじき血気ありてやまぬ。それよりして面色萎黄。脚脛に腫をさまよふし胸腹に動悸ありて起バ眩運し高きところへ登んとすれバ気喘さなどするやうになるハこれを黄胖といふ方言に腰下の病といふハ腰などくのわからんとすれバ。動悸ありて嘘ことおもしず仰ぎみんとれバ眩運して腰の下まて悩といふやの名なり。世にハこの病を治するみちを

知ざる醫士多きゆゑ。いろ〳〵に疾を抱き。生涯を終りあるひハこれが爲に夭死するものも又あれバ。この病を治すべき藥方の中にて。俗人の自製せらるべき一方をこゝにのせてこれを示べし。その方ハ鐵粉二十匁蕨粉十匁鷹の目硫黄燒牡蠣各五匁乾姜甘草各三匁の六味を。細末して。白湯にて三四匁つゝ用べし。この藥の主治ハ衄血下血などに多くして血液少くなり周身の血にみづを交へたるをもつて面部へめとこより。身體惣て黄いろになりて神彩乏しく。皮膚うきあれるがごとくなるときハ爪の甲白く成て裂るゝ。この散藥ハ鐵粉の眞赤なるまで焼たる絳礬といふものに五匁を加へ。丸薬にして用るも又よし。此方黄疸まゝ劑多く。用ゐで却て害となることなれバ誤混ざることなかれ▲乳を吐青き大便をするハ小兒のまゝあるとぞ

大便の色青く酸臭きハ。乳の腹中にて敗壞るゆゑなり。これハ癖疳急驚風となる漸なれバそのまゝ紫圓を用て下すべし紫圓の方ハ代赭石赤石脂各一匁巴豆杏仁各十ケ右四味合を芥子のごとく丸じ一次に十四五粒より二三十粒づゝも用て下してよし。母もしくハ乳母の病より小兒の大便の酢臭あり。やがて色青くなることあり。それハ母子ともに治をなすべくべからず。ゐべきとぞ▲茶を呑て眠らぬものハ白梅を砂糖湯にて用べし。嚴酢も又よく茶の毒を解するものなり▲淋病ハ痛甚しく小便するになやむものハ桃膠二匁甘草一匁を一貼とし。水一合入五勺にせんじ。日に三四貼づゝ用ひ。桃の膠ハ藥店にあり。又胡桃を研て泥の如くし霜梅をよく和などに入るゝに熱湯をさして用るもよし。膿出る淋病ハ陰

甚のうちに下疳瘡の發するは。茎内の鈌盆やゝうちにすみやく療治をすべし。薬を用ても的當せざる處方ハ棄おくにはかハなしそのハ愈る期ハなかるべからず。素人ハ何ゝもその利ひあるべきをせ

◭痢病ハ傷寒や時疫にて多くハ糞穢よりうつるものなれバ已が家なれバ。圊を別にして病者の糞を川へ流るか地中に埋るにしかず。これを傳染ともいふやまひなれバ旅行中などにても是を知るよしもあらねバ圊よりぞくをつゝしみて悪をとゝむるといふべし。此病の初發ハ寒こ熱なとあれどもいろ〳〵微すこして知がたし。且その始多くハ下利になれど快通をせず。渋りとて肛門へおしくだる如く窘迫があるゆゑこの病の初發のときハきこえてそそゞめるかゆし。あきらかにいろ〳〵あるなり。大盥の中へ塩五合ばかりと白芥子これハ八分ばかり合などを入て上より苞をかけ沸らしたる湯をいるゝ也。塩ハとけ芥子そいづるその湯をいつ〳〵のふんにして坐して半身を浴し温むる也バ顔より惣身へ汗の出るやうにするなり。附かさく熱湯をさしてよく腰脚のあたゝまるやうにさる也。浴衣にてよく〳〵拭て臥床に入り熱稀粥の温飩などをくらひてよきとのぶふして汗を取べし。此法ハ我邦のむかし感冒の初發などに汗をとるまで用ゆると。榮花物語などに「ゆあみ」といふものなり。今これを痢病の初發にちふせバこれにて大役もひよく通じてその病解まるものなり。後重なれど止ざるもあれど浴後ハ病勢多くハ緩慢なるものなり此「ゆあみ」を去らるへし。葛根湯などを用ゆるもよろしくあれど。葛根湯も唐麻黄を用ゆる方のごとく調合せざれバ効なし。

いま方ハ葛根一匁六分。麻黄一匁。桂枝。芍薬大棗各八分甘草二分ふて一貼四匁四分これを三が一と減ずれバ三匁三分を一貼とすこれより小服ニてハ効なし。さて汗をとりての後も後重窘迫猶止ざるハ腸裏ニ下すべき毒あるなり。しかれバ舌のおもてをみれバその候をあらハして白胎が厚くかゝる舌のおくのどのきハ迄ハ縁まであるの舌一めんに黄ばむのみならずそれとめあてにて下をなり。舌にかゝるものなくて後重窘迫あるハふつゝかに下されバ下剤ハ調胃承気湯よし。その方ハ大黄一匁芒消三匁甘草ハ本方の半を減て凡二分五厘この甘草ハそれほどのハへらさねバこれを水一合二分入て六勺ととり用るなり。この方に芍薬などを加へてもちひてもよし。病勢劇きものハ。大承気湯あるハ紫圓備急圓などいふ巴豆の入る丸薬をもちひ脉と舌とによりてハ附子をも大小用ひ効あるものなど醫士よく〳〵こゝろもちひて辨得て。決断するもの少なれバ妄なるをハもちぬがよし。剤を去りふ剤て却て後重努力のつのるもあを。このれハ接中などをいつ迄とも決してのむべきハ薬とをもちひもしてその動静をうかゞへてよきともなるあなり。此病ハあまたなれバいちいちハ記さず。此病ハ灸の効あるものの書れバ。臍の両旁天樞といふところへ灸すべし。塩を臍へ填て其上よりもくさ艾を多くもえるのするもよし。まづ口吻の寸を唇ニ肉とのいづるとりて一寸下くちよりそれよりその幅を紙を四角まきりま中ふ穴とつけ。その穴を臍へつけて⁘かくのこり左右上下四隅より八分ずつあれと八花の灸といふ。この灸ハ霍乱癥痞

留飲などにも用ゆ。つぎて小兒の疳疾に用ひて効あるなり。痢病の治法ハさま〴〵の差別あれバ此にいふところハ。たゞこれ實痢最初の治法のうちにて捷便なるものを示すのミなりとぞしるべし。痢病に。如しるして効あるものハ無患子の黒焼なり。これハ皮も實もそのまゝに坩堝に容て銅線にて十字様に紮蓋の間を泥に塩をいくらか交ぜぬりて。そのうへを火にて焼なり。とりいだして細末にし。一次に一匁づゝもちふべく用るなり。又鰻鱺の焼存性も諸痢に効あるものなれバこれらのものを予め製しおきて在陣旅行など事あらバ用ゆべし。無患子の焼存性ハ腸胃の[illegible]して泄瀉するの妙剤なり。されバ諸侯方にてハ昔より君侯さま方へ製して弘く施させたまふよしをきけり。

[illegible]草鞋にくはれ水疱の出来たるをその水疱を破りそれをとり焼たる赤螺と半夏を等分に細末して飯糊に交てつくれバ愈るなり。後の金創の部に出したる魚膠膏すべし。俗にの即効あるなどとぞいふよし。

か脚氣ハ最初より脚にいさゝかの腫あり。それ脚を重くして行歩なやむもの也。足脛より腫て周身におよび小便すくなく通ぜざるものなり。いづれも両脚麻痺するものなり。在陣旅行などにて小便通じ難しく脚より皮膚不仁なるとならバすみやかに治し。後水腫の部に出せる三輪神庫の小便通利の剤を用てその禁忌を守り。速に小便の快通するをもつて大きとすべし。むかし唐時代に嶺南といふ極南方より流行て北の方へ漸り傳へる脚氣ハ一種の疫癘にて。今の世乃脚氣とハ病因大に異なれバ。

よく薬方をのミ用ひてハ今の脚氣ハ治しがたし。今乃脚氣ハ多く腸胃の消化あしく。水穀の結滞より小便通じあしくなりそれが進て胸腹に迫り衝心するにもいたれバ唐時代に流行せし脚氣の人より人にうつる傳染べき邪毒なるものとハ同からず。今の脚氣ハ多く身體浮腫胸腹に水氣を蓄へるものが拘急衝逆で横床をせまるともそのうべなりくるハ。止ことを得ざ。をなさねバ危急にをふともうべし。早く瀉水剤にハ鼠李子三匁に木香乾姜呉茱萸各一匁とこの六味を二倍として水二合に煮て六分として二三貼も用ひるを大便がへ下して衝心ハゆるむなり。もし事急なる時ハ書家に用る雌黄しよふ血を三八分ばかり生姜の志ぼり汁を湯にさして用ふべし。ゆゑもまれバ吐を誘ひやすきものなれバそれをふせがんにハ。水をまぜてしくいん火土に融しそれに乾姜の細末を三倍ほど加へ丸薬となし。大豆ほど三匁を煎じる湯にて服せバ吐ことなし。又症によりてハ附子剤を用ひて治まるものあり。之を下しそのちに續て附子剤を用ふべきものもありて。病の變化定なければ。方も又一様ならず。故に此にハさしあたりて危急をまぬかるべきことを記したるのミなり。されどおよそ小便へ通じさするを順正治法とすることぞ。大便ハへ出すくハあまりきびしくすべからず。なほ脚氣衝心を治するにハ檳榔子木瓜呉茱萸旋覆花犀角紫蘇葉などの一貼をつのに二匁内外の薬剤にて治しうるハ薬の効ありしにハあらで。病のさかりとおのれと治しするもよく此理を辨ふべきことなり。▲鮣鱺魚の

毒にあたりたるにハ椎茸を煎じて服べし。榧実もまた効あり。甚しきハ吐剤を用ひてはやく吐しむるがよし。吐剤のことハ後のく七部霍乱の條に述べたれバ参攷べし。橄欖よく諸の魚肉を消化し鯊魚ハ諸の魚毒を解すといへども予ハいまだ試ず。又鯽鯉魚と胡椒とを同時に喫へバ人を殺す。これハ古の二物が配合て大毒となるものとこえたり。此等ハ確にその事ありしゆゑなり。されバ記て弘く人につぐるものなり

▲蟹の毒にあたりたるにハ丁子を多く煎じて服べし。或ハ細末して生姜のおろし汁を少しく湯にかきまぜて用ることもつともよし。冬瓜の汁もまた蟹の毒を解すといへど。それハいまだ試ず。槖吾の生汁をしぼりて用ゆれバ一切の魚の毒を解す。蟹の毒を解するにも効あるよしいへど槖吾の生汁をのませれバ吐を得て治するものなり。毒を消にハ何にても搾き吐剤ぞともあたへて用べし

▲蟹と柿とを同時にくらへバ毒となりて血を吐ことあり。唐木香二匁を二服とし。生姜二斤ばかりを合て煎じて用べし。又ハ木香二匁。丁子一匁を細末して用るもよし。

▲雁瘡ハ仲秋ごろ瘡の来ることあり。膝膕へおほく生る浸淫瘡なれども。いかしハ痒し。あまりながき小瘡なり。貼薬罨熨剤などをもちて強て愈さんとすれバ。内攻して衝気痛風などになりあしきハ心腹の病となりて。命期を促すことあれバ慎むべきことなり。掻破などすれバこの瘡発して頭脳にハ止ことをえず。その辺を刺て血をとらしとりなどして凌ぐべし。あまりなどふつることを戒て為べのぞむ。志バく浴することのよしからず。

こゝろみれバ毒を誘ひだし。膿となりて治するやうにすべし【よ】便毒おこらんとするに痛あしくとも強て歩行すべし。速に膿潰んことをもとむべし。いまだ膿ざるに鍼などさすことあれバ。毒のこりてほか害となれバなり。此の處をよく膿熟すれバ後の患を免るゝなり。旅舎に宿らバ浴後に白芥子末を布につゝみ熱湯にひたして朝夕とよく罨熨べし。膿潰ざる以前に便毒下しの薬などといふものハ決して服べからず。軽粉などの入る劑も膿を催さんとするときハ用て害なり。故に家に備ふハ巧者なる醫師に委く。後害をのこさぬやうに治すべし。徒にとする勢力ありとも必妄意なることをせず。自然に任せるのよし。故に卒爾に薬方ハ記ざるなり

▲礜石の毒に中るものハはやく油を服ときにハ。その毒を抱摂て死にいたるとなれバ。前に既にいふごとく。桃仁泥を服すれバよく火薬の毒焔を解するといふもその旨ハかねてとあり【た】煙草に酔たるにハ醋を服べし。又ハ甘草をせんじて用るもよし▲煙草の烟にむせくるしむものハ萊菔のおろし汁をのむべし▲章魚を喫て毒にあたりたるにハ。鹿角菜を熱湯の中へいれ解してのち滓をこして服べし▲竹筍を多くくらひて毒にあたりたるにハ生姜を多く喫ふ。又ハ汁をしぼり。砂糖をあわせ湯に點じて用るもよかるべし。海帯の煎じ汁鹿角菜の汁。および蕎麦殻のせんじ汁もよく竹筍の毒を解ものなり。苦痛はげしきにハ胡麻の油を服べし【そ】卒中風ハ厥といふ病の類

にて暴に發するものなれども。よく是
を考ふれバ。そのおこりし以前ふ其幾
ある病なり。これハ胃府を胸膈へつり
上げ。諸藏もそれに從て上昂て周
身の氣血頭部に進迫りて精神を
閉るゆゑに人の見さかひなくなりて
それなれバ。鼾出て睡のごとくにして
甚しきにいたりてハ。大小便を迯
すものなり。脉ハ弦といふて弓の弦と
ありするゆゑ。力あるこのごとくなれども。
絲紛なる脉をあらハせり。その治
まづ閉くを虚候とし。手を揺するを
實候とすれども。古人ハ久ど熱くその
説を發する人ハ。さとび體肥肉滿さ
まども又元氣衰弱て血液の運行遲澁
たるか又外邪に腠理を壅塞へその竅
飲食の停滞この志意の蘊結るを
るの妨碍あるによりて發するの他
みて平常上衝昏眩。又ハ肩強耳鳴
寐るにハ鼾息を發し。又ハ頻に眠顛を
いひ。或ハそのまゝ昏睡て覺がたく
或ハ凶夢をみて魘ゆるもあり。他ハ
妄に怒みだりに愁やすきハ凡そのこと
不懊熱多く。志定ならず。脉ものゝまさる
ず。膏粱美味をのみ房慾をまゝにし。
表ハ盛にみえて。裏ハ衰たる身體あり
發する病なること。たとへバ樹木のうち、
朽たる皮ハ榮たるものが暴風の爲に吹
折るゝがごとくなれバ病證ハ實候の如
くにみゆれども元氣衰弱より起らざ
るハなし。されどさしたる事なく胃口上
に迫り。多く血上部に壅塞腹中に停
蓄あり。痰飲沸溢すれバ止ることをゑるも。
肩を刺て角子を以て血を瀉いるといハ
肩項に蛭などをすへつけて血を吸せ。
吐剤を用ひて上溢する痰飲を吐せて。
胃中の壅塞を開達し。吐後にハ必ず
下剤を用ひてこれを下すべし

されバ之を救ふときの手当。初發ふ。ハやく嚏薬をはなへ吹入て。嚏をさすべし。くさめぐすりハ皂莢細辛二味を細末。胡椒の細末。笞根のくさめぐさ末。藜蘆の類。いづれよ急卒あしくあらバ求うるもなき時ハ烟草の末。又ハ半夏の末。薄荷の末。白芥子の末ふてもはやく鼻へつよく吹入。嚏をさすべし。これらの薬を吹入るよハ紙をひねりて鼻涕をのごひとりて後ふ左右ともによく鼻の底まで通るやうふ吹こむべし。結髪をとりて頭髪を提起べし。然して嚏出るものハやがて正氣つくものあれバすぐ吐法を行べし。若薬のまハ次のく乃終ふ霍乱の條ふいづべし。肩より血を瀉とハ時の宜ふ從へく。且素人ハ行ひがたきこともあれバ醫の来るをまちてよし。灸ハ天樞ろ前の痢病の條よ記るハ花

の灸より正気つけバ。右の次ろ半身郝ろ不遂よなるもの也。吐を洗く後よ。下剤を用ひ大便通利さするものふ。附子天南星細辛木香四味各一匁二分に。生姜四五片を加へ水一合五勺を六勺よ煎じ用ふべし。或ハ千金方の附子散和剤局方の三生飲などの單方ふて効ある方もいと多し。華佗に食じそうぬくよ處方の差別ハ遽ど此よハたゞ急卒を救べき片端を記するのみなりと知るべし▲蕎麥ふあたりたるふハ牡蠣の生汁をのむべし。楊梅皮を薬店よていふなるもの。此木の皮を細末してさゆよてのむべし。又ハ煎じて用るもよし。この二品ハまさく試ミ確よ効あるをて知たり。萊菔の搾汁。又ハよく蕎麥の毒を解するもの也。香橙皮の搗て汁とりたる生汁もよく効ありといへり。これも又用ゆべし。

▲走馬牙疳ハ、おそろしき小児の急病にて、すみやかに腐て歯ことごとくおち、脣頬すでに蝕て死にいたる。おそろしき病なり。速に硇砂・龍脳等分に、枯礬少ばかりを研合せてつけ、紫圓を用て下すべし。

ⓒ頭痛ハ其因さまざまにして、一槩にいひがたし。外邪にて頭痛するものハ、衣をかさね汗を發されバ解すなれども、上衝あしくとすこぶりて、汗をとりがたく癒ぬるもの、我邦上古の湯煮といひし半身浴の法に效、腰湯をつかひて汗をとれバ、孔を塞までにいつてしぬ。汗よく出れバ、頭痛たちまちゆるむものもおほし。やすくして愈ることあり。猶述之が痢病の條に、その事を記せるなれバ、のちに考て用ふべし。常に頭痛の持病あるもの、稼ぎして毎日日本にて宿疾のおこりするものハ、多く

この法を用て迷に解することを求む。もし上衝するはげしきものハ、大なる薬罐なるものに冷水を汲入て、椽端へ臥を出して頭へ灌のしべし。婦人ハ髪をほどきてふさつまげ、中剃のところより額へ灌のけてよし。これを拊水と云て、水療の一法とす。ひとつハ顳顬項肩および鉄盆とふさく等引科の脊後、小居くにすゞみの次指中指のところ、ほかなどへ鰒をつきて血を多く吸とるも妙なり。又ハ白芥子末一匁、龍脳末五分を酢にねりて、顳顬項肩へつくるもよし。また数日大便通ぜバ、香木葉ある脂なりて含味をとしなひ頭痛するものハ、調胃承氣湯を用べし。其方ハ唐大黄八分、芒硝一匁六分、甘草三分、煎じて用ふべし。上好の茶を濃煎じて用るも、軽き頭痛にハ効あるあり。ものなる含みきるとびと頭痛

するものは。唐呉茱萸を用ひて効あるものなれバ不換金正氣散などへ多く加へて用ふべし。建中散もよし。ことなるハ呉茱萸湯といふ方をもちふること最よし。その方ハ呉茱萸一匁。人参八分。大棗六分甘艸二分に生姜多く加。水一合二勺を六勺に煎じて用ふべし。いちじるしく効あるものなり。此剤ハ合なりそるごとに咳逆するも眩運嘔逆を発するものによくも用ゐて効ある経驗もすること多し。また。真頭痛とて頭脳中より痛をなし。え。やがて劇しくなりて後ハ或ハ昏眩失氣。やがて手足厥冷。脈沈微にして力なく。爪甲の色青く。脣白く。呼吸も絶んとするものハ死す。これ多くハ救がたし。まづ頭上の百會といふ所と。腹の天樞前に灸をする八花の灸などをして。唐附子細辛麻黄の三味各一匁の麻黄附子細辛湯といふ剤を濃く煎じて連服すべし。これに硇砂を腋振するも又よし。前にいふ白芥子。龍脳の引藥すこし樹水の御舌交藥などを試用しらるもあり。また諸家によりてハさまざまの剤を用べけれど。その方ハこの編にハ載がたし。ただ一方の用べきもののみなれど。まづ人々の傳へたり。

▲撲眼にて眼赤くなり。瞼痛にハ白梅を煎じてあらひてもよし。又水仙の根をすりて汁をとり。桔梗と小麦粉耳のきハにつけなど加へてさすもよし。

ね 寝小便ハ飽食よりなるもの。蚘蟲によるもの。臓の氣攣急によるものありて。一様ならず。飽食ハ食を減させ。蚘蟲ハ蟲を下さバ愈る。腹氣攣急のものハ卒にハ愈がたし。寝小便甚のねるハ。性怯く懶怠なるものに多し。かゝるものなれバ速に治しがたき病なれど。羇旅在陣などはまく

従者なとの患ひあらバ。竊に猫の屎の屋上にありて。數月雨露にさらされたるものを得日に乾て細末したるを丸薬として日々これを用ゆれバ瘰癧を治すること不思議の効あるなり。火に炙りて末にして丸にするもよし。また烏骨鶏の屎を効あるよしをいへども。それハいまだこゝろみざれバ▲猫に嚙れたるハかの犬にかまれたると治するものとおなじ。又猫薄荷をもちふべし。なきものハ酔ものゝ薄荷よし。猫の毒を制するといへバ。内服するのよし。生葉を得たらバ。其毒を治する手のうちのごとくしるゝべし。すりこみてもよし▲鼠に咬れたるハ。犬毒とおなじことなり。あれ有る。漢土人ハ斑猫をつけるといへり。すさ斑猫を焼灰にし。麝香を交てつくべし。ちかごろ萬上亭長を用ふるの便宜あらざれバ雄黄末をつくるもよろし。もし創の大にて浅きものハ用べし。又創所の血をよくしぼり出しなるたけ焔消の細末を發炎あるひハ火藥を塡て火を點じ。毒気を散ずべし。樸樕皮よく鼠毒を解といへども予ハいまだ試ず。綿實を焼てその煙にて咬れたる所を薫べしといへども。これも試みざる所なり。猫の屎をつけよといふ。これを制するの意なるべし。いづれにも獣咬毒ハ諸の毒虫の咬るゝにもおなじく皆肉中に毒をのこして後の害となるものなれバ。是をよく洗て後毒をおひ誘ひ出すものをつけてこれを除くにしくことなかるべし。のちのち此義をよく領會すべし■崩漏ハ婦人の病なり。婦女子旅中にて此病に逢時ハ道行をもなしがたく。大に難儀のもの也。陰中を冷水にて洗べし。之を治する法も

けれど。唧筒を用ひて深く子宮中を洗て後。坐薬を挾て止る術あれど。それも旅舎ありてハ施しがたく。いづれも醫の道。血の出ることあれバ身體頓に疲るものなれバ速にこれを止ることを務べし。その法ハ繭綿を二十匁ばかりを小さく束て陰中に容て。横に臥右にても左にても上にむけたる足をむかふへねぢやりて。臀肉を掌にておしつけ壓させれバ。陰戸ハおのづから閉るものなり。かくのごとくすること一時ばかりをすごせバ。陰戸中の破るゝ細絡ハおのづから愈ゆるゆゑ血の出ることハ止むものなり。内服剤の速に效あるものハ。枯礬二匁。騏驎血一匁を細末して冷じて用る。枯礬阿煎藥各二匁を散藥にして用る。この又ハこれらの剤を布につゝみ陰中へ坐藥として用よし。此二種のうちいづく。薬品のなきときハこのごとくこれをつゞきて服せよし。漏血止ざるにハひざるゝ丸散を用るにも冷水を以て送下。煎藥ハ冷して用るぞよし。此外のくにこれらも治されども。煎藥をもちひんとならバ艾葉當歸各六分。唐阿膠川芎各四分生乾芍藥八分地黄一匁二分。甘草一分。七味合せて四匁一分を一貼とし生姜を少し加へ水煎じて用べし。これを芎歸膠艾湯といふ。子宮中に蓄血あるの悪肉などを生じ。又ハ瘡を生じたるなどより。崩漏を發するものなり。それらハ稀候も治法も大に異なれバこれもよく〳〵辨べし。

ら　雷震死ハ雷火の地におつる響にふれて氣絶したるなり。これハ多く時を過さゞるものハなお救べし。その救べきものとそふ所のしざるものとをよくみわけてこれを救べし。そのべからざるものハ拔張色變ト。周身

らかにして色悪く。ぶわ〳〵とちかなる斑點あちこちにあらハれ。肉柔脆くして。これを按バ凹くなりてすぐにおきず。鼻より臭き液ながれいで。眼凹みて口開き厭ふべき屍臭あるものハ救べきにあらず。もし救て蘇るべきものハ静かにそのさまをよく診バ口吻すこしびくつくもの。燭をとりて眼中をてらせバ瞳孔ちゞみ燭をさらされバ寛くもの。鳩尾に掌をあてゝ診バ内に温をおぼゆるもの。燈心又ハ鳥の羽さきか蝋燭の火を口鼻のあたりへちかづくれバ動き見ゆるもの。或ハ眼を左または右にかたむく。いきのすこしかよふもの。頬の色なほ赤みあるもの。磨破ある所より血の流出るもの。耳に口をよせて名をよべバ面の肉動くやうに見ゆるもの。眉につれたる上の皮を指さきにて強く按しあてバ。凹たる所ずん〳〵もとの如くなるもの。この九ツの候のうちに於て二ツ三ツあらバ。必ず死たりと定むべからず。これハかゝる急病にて呼吸のかよひ絶たるものにても救べきものと救ふべからざるものとの差別をよく辨知す。これを決べきをいふも診候の緊急なるとせ。近世の醫人ハ多くハ薄情にして。診候におゐて気を注るものを少し。これハ素人もよくかゝる所を捨てざるを救ことをとるべし。さて急病卒死したる人ハ。第一に心得べきことハ。呼吸の往來絶たるものに。氣付薬とて蜜にて煉たるものを用ゆるなれバ行きとゞき氣息のかよふ咽喉の所ひろがりて些少のものにても妨礙となり。これよりていよ〳〵息の往来を歇。蘇活べきものも蘇ことかなはぬやうになる也。煉藥ハもとより丸散煎藥の類も呼吸の出ざるうちハ。一切戒てあたふべか

らば柔術家の拳法の中にて肩の活天樞の活内股の活臍下の活いづれなりともよく学得て卒死の者に行べし。今此にその挭緊を示し。肩ハ按摩の人ハ脊後へまハれバ。両の大指と次指中指とをもつて両の肩の肉を三指頭にて緊く摑力を極てつかみくしとしろのこえを絶入にべし。背ハ六七椎乃ゆるみを四指を屈く平手にて内に徹るやうにしつかり。天樞ハ臍の両旁左右へ臍より曲尺にて二寸五六分のところ左右相去る三寸一二分。この両旁を指さきにて力を極て按ときハこの所に徹りて痛をおぼゆるところなり。内股ハ陰所へ近き股のつけ根乃両の肉をつよく按せ。臍下の活ハ後のくび乃部縊死の條にいへり。其處ハ臍の下と陰所との正中にて丹田といふ人乃體の中心也。この五ヶ所の外にも内に徹るところいへれど。ゆゑ右の五ヶ所の中一ヶ處まで也。内に徹頭脳へこたゆれバ氣息ハ出るなり。且しばらくして息出ば帯をときて。頭面より肩脊胸腹両股脛上より左右の手足関節股の内外膝臏両脚にいたるまで壮年の者両人にて付て。関節より肌膚を按摩しあがり。摩擦べし。羅紗毛氈などの類あらバそれにて摩擦るもよし。如此惣身を揉やハらげ皮膚を摩擦をハてのちバ。鼻の左右乃穴へ竹の管をさしこみ右一齊につよく息を吹ふき入れべし。又ハ鼻をふさぎて壯者の口を直に卒死人の口へあてて息を吹入るもよし。または鞴の管を口内へ挿て。風氣をつよく吹いるゝもよし。扨吹入てのち。胸肋を左右の手掌にて按て内より入る風氣を押出て。又

吹入るなり。かくするハ胸肋の間なる肺藏の呼吸を出納する機轉の絶たるものを挽回んためなるとあれバよくその氣をえて行べし。膻中とて両乳乃眞中平症ハ鍼すべからざるなれども卒死の者ハ少しも此所へ鍼を一寸ばかりも骨を貫き刺べし。虫を畏べき鍼科にて秘傳とするところなり。これハ心臓を刺て絶たる機轉を再呼回んとするの術にて脊を打て内より響の徹るこの心肺へあたへさするためなり。よくこれらの意を得てこれを行べし。やゝ鞴を以て気を肛門へ吹くもよし。芬吹の大頭を去て。吸管のかたを肛門へさしこみ別の煙管をとりて。煙を口に含え肛門へつよく吹入るもよし。嚔ぐすりハ皂莢細辛二味の細末胡椒の末華撥の末瓜蒂末木藜蘆の末白芥子末などを用ひてよしいさゝか氣息のかよふとみバ冷水を面へふきかけ。又ハ醋を鐵器石瓦の焼たるに。炭火よそゝぎてその烟で薫のむるか。醋の氣つよきものなり。硇砂を入てのかゞするか。天樞臍下あるひハ前にいふ八華の灸をすゑるがよし。生氣復するとも脉なほ微にして四肢冷るときハ附子人参おのおの二匁乾姜甘草おのおの一匁に水一合八夕入七勺に煎じ。少しづゝのますべし。諸卒死ともその旨を領解しぬる後ハ時に小應しよる裁量も出るものなり。當て三歳の女子の滞食して氣息乃絶たるものに小粒の紫圓三百粒許を舌上に含て湯をつよく吹入しのバやうやく下隙とりとゝえしが。けるまで十利を得て治しありしこれらの事もよく考へてすべし

む 蜈蚣に咬れたるも前の犬に咬れたるものとおなじ

ふく納えすてよし。蜈蚣の毒内攻されハ咽舌脹出るそれにハ雄鶏冠血を生なから切て口中へそゝぎ入て服しむれバ愈るといへり。雄黄に生姜のおろし汁を加へてねりするも服さするもよし。醋を加へるも又よし。雄黄ハ諸虫獣咬傷に効ある物なれバいづれにも内服しるがよしいづれの咬傷にても。硝石又ハ火薬のれを傷所に抹て火を點て毒をたくむるとも。葛上亭長斑猫の類を外傳て毒を誘出さとハせるがよしすべて細くの小虫の刺咬さるハ血をしぼりつぶし置るのち發燭又ハ紙條に胡油を醮して火を點て傷所へ滴らしむもよし。一切の毒虫類の咬刺さるに用てよき方ハ雄黄。硇砂。明礬露蜂房各五分。麝香二分細末して蜜にて練りおきるを創所につけ又酒にて用てよし▲齲齒の痛ハ

川はの部歯痛の條にみえたり。むしばのいたゆるのハ朝夕の口漱に。冷水のみを用ひ食後ハのとよう。いさゝかのおれあをとひさしかならバ冷水にてうがひするをふくみしておろさざれバ痛やみて歯牙堅くたもつものなりもし下顎につきたる齲歯乃痛あらバ乳香末。小麦粉を等分にのゑを鶏子白と焼酎を加へて煉るを下顎の脉動ある所へつくべし。この藥を顋顬へつけてよく頭痛を治る効あり

ろ 馬に咬まるゝにハ葱白を四五寸そろりきりたるを束ねて。創口をしきりに摩擦べし。痛そのまゝ愈るなり。又馬歯莧をもてつくるもよし。▲打撲ハなるべく醋に樟脳を入るゝを温め布に浸て熨べし。血の凝滞るあらバ鍼にてるも剃刀隅尖にて所々あさくさして血を去

なり出るがよし。そのまゝに續てあやがてちるものなれど。かくすれバ。まれ〳〵よし。すべて酒ハ血を凝結す。醋ハ血を融解するなるを。世間の正骨科が酒を用ひて藥を調和てつらるハ。こゝろえ違なるを世俗人もよくこのことを辨べし▲打撲ふろく氣絶しるものゝ部雷震死の條に記するごとくにて救べし。また仰ねかして其上へ跨て両手掌を以小腹を。うんといふて下より力をときあぐ上のかたへつきあぐるやうにすべし。これハ又かゝりの活なり前の雷震死の條にあるを考べし。およそこれを一切の卒死に用べし▲餓死ハ數日食ハずして死ぬるなり。氣息絶などならぬハ。熱湯に塩少ばかりを入て。手拭をそのものをつくもなくその中へいれ。このごとくあてゝとりかへとりかへ臍のうへよりはじめ腹をのこりなく蒸温むべし。かくてゆりかへし腹の裏へ徹れバ息出るなり。その時紙條をつくり鼻をさぐり。のろく嚔をさそふ。味噌汁ありなバさましてその中へ湯を半分ほど入て。少づゝ服すべし。白米を煎じたる湯なれバ。なほもよし。それより程過て稀き粥をすゝらせその後に白粥を三日の間喫せ三日めに飯をくハすべし。餓人を救んとて飯を與れバ。食ふやいなや死ぬるものなり。故に凶歳に志あるものハよく此義を記得べし。數日食を得ざるものハ。濃粥なりとも卒爾にくらはしむべからず。一切餓莩人を救にハこのこゝろえあるべき事なり

ゐ井戸の久しく廢おきたるを汲んと

して。その毒にあたり昏眩失氣をなしたらんハ。嚴醋を頭面へ吹かけ。口中へもそゝぎいらしむべし。忽息出て甦るなり。究庫の中に中る者も。醋を用て妙に覺るものなり。醋ハすべて窒塞て生ずるところの炭氣を解するをもつてはたらきあるものなれバ。傷寒病人の室などハ。上鍋に醋を入てやわらかなる火の上に煮てこれを薫ずれバ。病者乃爲によろしく。人に傳染患を免しむ。その益すくなからず。すべて鬱閉る所にハ。人にあたりやすきものを生ずるもの也。これを排除んとおもふにハ。火を焚べし。井戸究庫などハ火をともしてこれバ。蜡を多くそゝぎ入るべし。このすべてハ炬火を下おろしてこれを照すべし。故に久しく蓋をなしたる究庫井戸などハ。まづ蠟燭に火をつけて内におろしみるべし。忽消るものハ。かならずその氣を生ずる也。故に炬火もよく燃つきざるにハ。つねハ消安し。常に人の住ぬ堂社又ハ石室又ハやれたる別荘などの常に戸ざしたる所なども此ごとくにてハまづその戸障子をあけはなち。風の往来やうにし。内にて火をともすべし

◯の咽喉腫痛證の起因ハ。さだまらねども此にハ世に多くある所のものゝみを挙て示すなり。まづ前なるハ氣息の往来所乃のんどにてこれを喉といひ後なるハ飲食の下降ところののんどにてこれを咽といふ。喉ののんどが拒る時ハ息まる不障となり。咽乃のんどが腫るときハ飲食の下降に妨となりて悩なり。今の世の人こうひといふハ多くハこの咽にして喉にハあらず。名義さへ違ぬれバ療治

とまるとも。すこし疎漏あるときハ後じて。その咽の痛の最初なれバ速く唐の甘草一味を一貼三匁ほどにして。水一合二勺を六勺に煎じ。二三貼も用ひれバ痛忽愈ること。など[illegible]の如きことあり。これを甘草湯といふ。もしや遅れて。よりとゞこふりのハ生乾の桔梗一匁五分加へて用べし。これを桔梗湯といふ。これハその大かたハいゆるものなり。腫つのり膿潰て痛はげしく。そのいふとも事ならずして悩むものハ。厳醋一合に。半夏の細末五分。鶏卵一ツの白ミばかりをとりわけ入れ。茶釜に入てかきまぜてよく混和するときに。火にのせて一沸煮たてらバ火をおろし。結ふて冷さるをまに少しづつのむなり。これ古の苦酒湯を予が意を以て。今簡約なることを後の方なり。すなはち鐺五勺許に硇砂七八分を融化しておき。これを含く。咽にひたしめてのち呑下するもよし。或ひハ硇砂枯礬等分を細末して竹管にて咽の中へ吹入るもよし。此三方ハ。疱瘡などの咽に多く発て。声唖飲食のとほりがたきものにも。瘀毒にて咽の腐蝕するものにも用ひて効を得ることまゝ多し。大便秘結するものハ涼膈散又ハ調胃承気湯などのくすりを用ることもあり。もし病勢劇く熱熾なるが如く咽の内外腫痛して堪がたきものハ鍼を多くとりて項より咽のまはりへ四五十ほどつけて血を吸べし。すこし傷寒にかゝる。下利ありし後に。脈微にして絶んとするありて。咽の痛はげしきものハ。通脈四逆湯といふて。参附の大剤を用て救ことあるものなり。その他にも咽汁壊爛して飲食の下降がたぬるやうなありさまのものハ。すべて治がたきものなり。

みだりに血をとり下剤などを用ゆれバ。たちまち人を殺す。おそろしきこと也。今の世乃和蘭醫者にかやうの弊多ければ素人ハよく心得おくべきことなり。婦人の病に咽になにかものゝかゝるごとくおぼえて。すこし痛をなし。あるひハ腫ありて嚥下を妨ることあり。これハ前に咽の痛とハ大に相違の證あり。混ずべからざるもの也。これにハ半夏厚朴湯といふ薬。いとかろく平穏なる剤なれども。妙に効ある方なり。その方ハ半夏一匁六分厚朴六分。茯苓八分紫蘇葉四分合せて三匁二分を一貼とし。生姜三片をくハへて水一合三勺を六勺に煎じ。一日のうちに五六貼を用ひバいゆるなり。これらハこの蘭醫ハ瀉血などをして妨碍となりしをそれさうかく相似て異なるものをこのめバ忌意なることをあやまらずよし。つゝしんでおもふべきことならずや。又小兒に馬脾風といふ。息の往来ところの喉ハのんどにつまりて。ひいとつらく息出ず。大に悩ことあり。これにハ硼石一匁枯礬五分銀朱三分乃三味を細末して。竹の管にて喉頭へ吹込。新汲水を口にふくみて吹こむ。また茶器に入く呑べし。妙に効あるものなり。この薬を用るにハかならず水にて送下すべし。湯ハ一切のむべからず。今和蘭醫士の為ところ看るに。此證に瀉血そのほか。蛭をつけて血を吸ハしむれど。これ知見の至らざることにてもれバ却て命を損なり。今此に記ところの方ハ効の速にして百發百中あるにかなはざるなり。▲咽へ苦のをちたるハあまりに餡をくふべし。膠飴よし。又紙條を鼻へさし。くさめしてもぬけることあり。魚骨の哽も又くさめをすればぬけることあれバ心得べし。

▲咽へ薬などのつかへて。のみこまれども下りかぬるときは扇のかなめを紙につゝみてつきつれよといふをとりくどれば。いたづらに咽をいためて効なきこと多きゆゑ也。乾芋梗にておし下すといふ。扇のかなめにハやはりおとるとおもへる。道どそれよりハ麻油をのみて滑をそ下をやすくするとハいふべからず。これらにハひとつゞの一二勺そのまゝて効となるなり。○鹿角菜を熱湯にひみて滓をなかりさそするにても。○團餅薬などの咽にかゝりてたるハ下るなり。かゝるときハふご迯りの羽ふをよしとす迯バその気をゆるくのちハ。時ふ應じての斟酌あるべきことなり▲上衝つよく肩強眩運頭痛などして擁行に艱とあり大便通じなきよう起となるバ。下剤を用て下しなるこのよ。されどこのなりふ下しきされバ心下却てこの。上衝のつかるゝことのあるもの也。其時ハ黄連胡黄連熊膽猪膽牛膽などやうハ黄蘗皮を煎じつめたる。陀羅助などいふの味苦きものを用れバ。痞ハいゆるなり。○もし上衝つよく卒に昏冒失気んとせバ。すみやく冷水一盃を一息にのむべし。むかし日本武尊の近江の膽吹山にて雨をしのぎ霧をおかして山を陟ゆきたまひし。此山の瘴気にあたりたまひうかうかと酔るごとくになりたまひぬ。麓の清水を飲て覚めたまひしといふ。水の効なるがゆゑなり。○婦人の児を産むときそのまゝに冷水一盃をのめバ。昏眩して死ぬる患決してなきことなれバ。○加賀川家にハ黒薬さへなく。○麻の嫩苗を焼たるを胞衣のつまりて下ぬるときに冷水にて服さす。麻の苗に効あるにハあらで水に効

いるゝところのむなり旅行在陣の下剤にハ加減消石大圓を製しておくべし。その方ハ唐大黄八両官製人参六両精製消石四両唐甘草三両この四味を細末して丸とする又唐大黄百匁に水三升入て一升に煎じ滓をとりて再火に上せ五合ばかりになりたるとき精製消石五十匁白蜜百匁を入て煮ること重湯にて煮つめてのとき飴のごとくして器にいれて蓄へ用るときに湯にて融化てあるものゝ殊に良とす

く 霍乱ハ食傷の吐瀉急しく悶乱するその名はて別に霍乱といふ病のあるにハあらず。暑気あたりのやうにて流るゝ人あれどもこれハ四時にある病にて暑邪にかぎらず。暑ハ正気を通バ妄に人にあたるものにかぎりて然るに暑月夏秋の間にこの病の多くある所以ハ是凌ぎがたく冷水を多くくらひ恣に氷を呑ゆるとし酒を飲むも。冷物を着してあつくるしび。その上に樹陰に涼を納風のあたる所に假寐して身體を冷し夜気に侵されなどして腠理の開達しく内に迫て發る病なれバ畢竟ハ冷気の中て病となるものにて。暑熱に傷らるゝものにハあらず。此病甚しくて上りは吐下りは瀉て止されバうちやぶれ氣脱て卒に死ぬる怖しき病なり。すべて病ハ皆手あしらひなるものなれど殊にこの病ハ至りて不養生なる人にある病にて。その小なるものを養て大なるものを悪る小人の患るところにして。左にそゆるがせにすべき病にハあらざる。きて吐瀉急しく。四肢も厥冷て脉も微になりなバ四逆加人参湯という方を用べし。その方唐附子一匁二分人参一匁

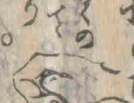
もしくハ二匁。乾姜八分。甘草六分四味合せ
て三匁六分もしくハ四匁六分ふろ一合五勺
入て六勺ま煎じ連て二三貼も服すべし。
もし下利ハ甚とまるく吐逆劇しく
止りねるふハ甘草乾姜各一匁二味合せ
て三匁ふ水一合入て五勺ま煎じ用べし。
これハ甘草乾姜湯といふ至て軽きもの
なりハ益智飲とて唐木香唐呉茱萸唐
益智各六分ばかりを。水一合入沸さしバ火
より下し滓をにして用るもよし或ハ呉
茱萸を去て青葉藿香を加へ用てよし。
下利あるものふハ唐良姜を加るも
よし。建中散丸ゆるく用べし。もし吐下
まあしく薬を煎ざる暇もなりぐと
思ふるものふハ臍の天樞よ灸すべし。
これハ臍をさると大人の體ふて曲尺
一寸二三分。左右相去と三寸五六分也
ふの穴處へこれを確よきんとおわりぐ
紙條の稲稈ふく。乳と乳とのあひだを
とり。それを八ツよ折その半を去のこ
りのなかをふたゝび二ツふをりて折目を
臍へあてゝ左右の端よ點をせるなり
灸をする所ハ前の雷震死ところふ出を
る。卒死のものを救べき活法ふも用る
うちふ一ケ所ふてよく響動の内り
應るところなれバ霍乱の吐瀉する
ものじきふも傷寒の陰證ふも用て
薬ふ優る即効ハ數十年來試て知
ところなり。あるひハ八花の灸も又
よろし。これバいづれなりとも速ふ灸
をするもよしとするなり。吐も
なく瀉もなく。心下苦迫腹痛悶
乱胸膈へひしとつかへ息もつき
がたきやうなるものバ指をさし入て
吐氣をきざすやうにすれども吐ざるハ
鳥の羽のさきへ油を少しつけて深く
咽のおくをさぐりつるべし。其まゝも
吐となくバ瓜蒂といふくすりよ

出るまくは瓜のへたばかり薬店にありても是バ。そのまゝ末にすれど茎につきたる所ハ効なけれバ。切去て蔕をとり三分ほどを生なる赤小豆と等分にあハせて細末にし。砂糖湯に入。のませて用べし。苦瓢の實。茶の実も又よく吐をもよほすものなれバ。瓜蒂なきときハ用べし。分量ハ瓜蒂よりすこし多くしてよし。そのほか吐さすべきものハ箱根なる藜蘆の類なる嚔をもよほさす。藜蘆。木藜蘆のるゐハ品ハ劣れども代用してよし。和蘭より舶來するの吐根といふ薬も。瓜蒂とおなじほど力あるものなれバこれも代用してはじまり劇き吐剤なれど素人に用ひがたし。蒼蠅の頭ハなべてこれ三ツをとりて用ても吐を誘ふもの也。人糞よく吐を催すものなれど不潔ものゆゑ人も厭バ用ひがたきなれどいづれも得のなき時ハ用べし。古人ハ牛糞を吐をさするといへど。これもそれにおよぶべし。糞などハきたなきものなれバ。まづ吐薬ハ砂糖湯か大棗などの煎じ汁にて用るがよし。左なけれバよく胃府に落つかぬなり。吐薬を用ひしバ極て熱き湯をたくさんにのむべし。吐ても猶湯をのめバ吐を催すものなれバ。湯をたびく呑がよし。すべて熱物ハ吐をさそひ冷物ハ吐をとむるゆゑに吐剤を用てハかゆをいむなり。吐つくしたりとみバ。消石大圓。大黄煉の類か。調胃承氣湯を用て下すべし。吐後。腹痛やまず。宿物あるやうなるものハ備急圓といふ丸薬を用てくだすべし。これハ大黄乾姜巴豆の三味を等分にして細末し。火にて煉つめたる蜜にて丸ぜ。糊をまぜずともよし。大黄乾姜ハ十倍にしても。巴豆ハ大に力あり

ぬれバ。巴豆などいれてハ。丸薬にかなふ
ごときゆゑに。隊伍するもの也。これを
うちくだきて用ゆれバ。吐をもし。誘下利
をもなすものなれども。胃口に停
滞するものハ。吐させて後に下をぞ須る
まづ吐剤をあたへてのちに下をせ。
備急圓ハ。在陣羇旅などにハ。用ひて
人の危急を救べき方なり。この丸子
およそこの三分ばかりを用ゆれバ瀉也。
あるひハ小さく丸じたるもよし。
水腫脚気の衝心するハ肥前瘡内攻
して水腫をなしやがて衝心せる
ものなどにも。これを用ひて大いに下して
治するなり。なほ又これを須ゆべし。
霍乱の吐下なきものを卒爾には
じめより吐下の峻剤ハ用べからず。
平常壮實なるものにも。よく／＼若
同を観決て。もゆる羽をとりて咽を
さぐりまたハ生熟湯とて熱湯と水
少しを含ませてそれへ温湯を少し
入るるをのませしむ。吐を誘などして
先吐のさきをえてのちに吐下の薬ハ
用べし。およそ病ハ人の體よりおのれ
からこれを排除べき力用あるもの乃
なれども。その力足ざるところを助ん
が為に用る鍼灸薬なれバ。かりにも
素人などの用まじく忽意なることを
きんようなるべきなれバ。自然にまか
せあるものよし。建中散といふハ乾姜桂
枝唐木香唐良姜唐縮砂丁子各等
分唐呉茱萸半減この七味を細末に
して気の洩ぬ器へいれて旅行にも用
ゐし。もちふるにハ一帖二匁ばかりを
沸湯にてふりだして服するなり。この薬ハ
感冒の汗をとり暑気にあたり吐下利
をとめ。痢病霍乱疝気積つかへ婦人
の血の道などにも効あれバ。いろ／＼
と便利の薬剤なれバ。霍乱のうろき

ものハ。おほくハこのむきこれのみにてよし。する霍乱にて用べき薬の一切なきときハみち。生姜二三顆ばかりを刻み。湯に煎じても用ひ。又ハ研て汁をしぼりて湯に入て用るもよし。又ハ酢へ塩を一撮入てのませてもよし。白梅の大なるもの五ツ六ツ。水煎じて用る方もあり。細茶と乾姜と等分にして。細末したるを用る方もあり。又ハ芥子末などの類を湯にて練りて臍へ塗つくることあり。皆古書に見えたるところ。効あるべきものなれバ記得おきて急を救ふ助となすべきなり。霍乱吐利止てのちハ。米粥を稀くして少づゝ喫せ四五日のあいだハ決して飽食をすべからず。すべて消化がたきものハ禁ずることよし▲縊死するハみだりにその縄を断べからず。かならず縄を断んとすれバそのはずみに縄が締ゆゑに。一段つよく縊れバ活べき者も息止りて死ぬるなり故に臺にのせきものなし。いそぎてなくバあとをいつもの如くね姿を縊人の足に平げまづくゞみしてや一人ハ縊人の後へまわり両手の指を組合せ。臍の下をひしと抱て上の方へもちあぐるやうにして。その時ほかにひとりまづ一人ハ利刀をとりて梯子へ登りて縄を断ときに臍の下を抱る者とたがひに声をかけて縄をくつろげ。臍の下をおさゆるともしも咽喉あのやうにうんと力を入て臍の下を抱ゆる者ハ足を踏とめて上の方へ引あぐるべし。これも拳法家の話の一ツなのいハ縊人の面をとる指まで力を入てつよく上の方へ擘ものゝ内へ徹るやうにすれバ。その時縊人にわかのさハ一息ふつとはきて息出るなり。さて

掖下を抱かゝへるの。手よふ立て。少しも動かさゞるやうにするなり。縄を断るときハ畳もしくハ床の上へおろして。手を縊人の首へそへて。其のうしろぬやうにしづかに力をいれて其縊したる索の上へ坐らせて。さて掖下を抱へる手を離し。項後頭をもちてほうを大指と次指中指にてもちて掴揉ことやゝ久しくして。内に徹て縊者の顔をながむるにどふかなし。それより両肩の真中の肉をつよくつかみあとハ全て雷震死の條にいふがごとくにしてのち脊の六七椎のわきをすぐと右手の拇指をのばして



平にしてさするのうちかへし。それにて正気つきたるとの時新に気をよく吹こむべし。嚏藥あらバ紙條を鼻へふきのくさへいれてくさめをさすべし。めしこれにて息出ざれバ口をつけて息をつよく吹入るべし。息気出ざるうちハ一切茶ハ用べからず。却て噫吸を止て死を招くことおほくあるゆゑなれバなり。○再肩井天樞内関などの活法を施し。鞴を用て気をつよく吹入。胸肋を接て氣をつくべし。あるいハ肛門へふいごを接て風を吹入るゝか。煙草を吹入るゝもまたすべてこの部雷震死の條にいふ所を照し合て試べし。○縊て時を過れバ咽頭のこのところへ血が集りて凝結のあれバ三稜鍼を乱刺て角子をかけて血を吸とるもよし。血出れバよみがへる事あり。少しにても気息のかよひかへるとつかまへることを前にいふ縊死るの羽を入蝋燭の火をもちて診知らバ其上の正中百會のところへ二三ヶ所臍の両傍天樞などの灸を灼てみるべし。さてかゝる治法ハ沃して

行とゞく。心静に。愛憐の情を掛るにして。ゆる〳〵し。のゝぬやうにとりあつかふべし。されど舌伸出て口より涎を流し大便洩出るものハ。もちひがたし。

▲折傷ハ骨臼の脱るところを引入曳のばせバ。正骨科の極意の秘傳なり。る。肩乃骨ぬけれバ。下へむくうしろへより前へ廻して引やうにするの肘ハ左の手と肋骨へつけて。右の手にてそのひつぱる。かゝれバ骨節までおさまるとて引バ。おさまでのるものあることを知得時ハ。身體の中に接ざる骨ハなし。かく正骨といふものも一言にて秘訣ハ盡をるものなれバ。正骨科の弟子といふハ。外に傳べきものなれバゆゑ之骨節がはづれしバよくこの義を領會して速にこれを療治すれバ。さして腫も出ず。そのまゝに愈て素のごとくなるものなり。醋ハ血を融き。酒ハ血を凝すものなれバなるべく打撲折傷ハ醋に樟腦を入るをもて温めて熨すこのは然るを正骨科が酒をもて貼藥などを調へ用るハそれ違也ゆゑ臂肘股脛などの骨も折たるときハ。木綿を醋に浸したるを以ていくへもまくやきて黄柏の皮乃厚きものを熱湯に漬かきさまして纏べし。又そのうへよりくゝりて札系まき。股脛ならバ。大小便に寝たるまゝにてまてるやうにし。なるたけ食事ハ人に餌ハせてもらひすこしもうごかさぬやうにして二三日をおくれバ。おのれと接續て。十日ばかりにて素に復する天地造化の機關ハ至妙なるもの。實に驚くべきものなり。その正骨科の秘訣ハみだりに記ぬるに彼に對してハいかゞなるべけれども旅中などにて不慮の厄難に遇ことあるものゝ為にかく述

にハのせられたり。近年刊行の軍中備要救急摘方といふ書に俗家に示さんとて。正骨の圖を出しおかれバそれらとみてそれそれにまかせて急を救べきこと也

▲鐵の釘など口に含へるを誤て呑たるハ生乃韮の葉をくふべし韮の葉釘をつゝみて出るなりと以て釘鍛冶の家にハ。かならず韮を蓺おくといへり此物の釘にかぎらずこのむ効ありハ鐵の鍼を呑たるにもよし又必効あるとかや

▲蜘蛛に咬れたるにも血をあらひすとハ犬咬毒にかふべくなして薤白をすりて貼べし。後の壁宮を貼藥にもよし。青蜘蛛の毒にも毒あり。西廣にハこれを毒烟に用ふとなり

や 箭の肉中に入て出ざるにハ前の竹木刺の條に出したる蟷螂の粘葉より松葉の黒焼も効あり。いのちもあやうく入て出がたきにハ肉を切ひらきて出すべけれど。おもこのごとくハ蟷螂の粘葉にても効あるなり

▲湯火傷にハ鶏卵を擂盆にて摺て胡麻油をよく混このませてぬりつくべし。又そのねて製たる湯溢もみな火傷にも用て効のあるきてる方ハ鶏卵六七十個を湯煮して白をとり黄ばかりを炒鍋にてそろりと炒れバ油出るとき油搾にかけバ。細布にて漉て油をとり壜に入て蓄置。これを塗つくるなり。ここの湯火傷の最上の薬ハ雲丹を水にてといてぬるも効あり。やけどの至て軽きものハ。火の上にかざせバ忽ち痛とまるものなり。又ハ稿灰を多く水にひたしあるを布にて漉しその汁の中へ浸しおけバ痛軽くなるなり。火藥にて身焼爛るハ酒樽の中へ醋をいれて暫く浸るとよし。重きものハ死ぬもあり。されバ火毒内攻して死ぬを害べし此事は湯火傷に効ある方ハ胎の生汁或ハ蒲黄末を煉てぬりつくるもよし。又蒼耳の

とをりてあがりくる水をぬりてよし。又牛糞の新しきものを鶏卵にかきまぜてぬるもよし。又胡麻をすりまはして貼もよし。又葱白を搗爛して蜂蜜をくはへ膏薬の如くにしてつけるもよし。又白亜を鶏卵にて練りつけるもよし。又樟脳を少しくはへ。胡麻の油をも入てつくべきことなり。しかして剥るを竈中黄土の細末をよく水にて煮ゆると濾てぬるもよし。大黄の細末を水にて練りてつくるなどいづれも理のあるものなれば時に應じて撰用べし。もし身熱つよきものは前に出たる調胃承気湯の類を用ゆべし。便いせしふるものよし。又腐爛してくさ臭気あるものは樟脳を焼酒に入て火に暖め。布に浸して熨るもよし。又は石灰十匁硇砂五匁を焼酒に浸し。あたゝかくなして淬べてよし。火に温て熨すはあし。火毒内攻すれば死にいたることもあればつゝしみてかたく絶べきことなり

▲壁宮に咬れたるは血を擠出しそのあとに硇砂雄黄二味を研末にして貼るもよし。この薬は諸虫の咬傷に用べし

蝮蛇に咬まるゝは其害大毒より甚しく且速なれば。そのひゞきたるべきところ。糸もてか犬毒の條にいへるごとく。咬るゝ牙歯の涎の人の血肉に混じてひろがりて周身へつたへて害となり。死にいたることあるものなれば速にその毒を去ことを第一とすべし。蝮蛇の咬る創口へちいさければ。必ずそれを切開きて後に血を擠出し。水にてあらふべし。犬咬傷にいふが如くすべし。後に毒の蔓延をいろ〳〵よき物あれば。咬れたる手足なれば其創より少し上の方を木綿をさきてかたく紮ぐべし。それ弥蔓をふせぐべし。人の糞をつけて大きなる艾を灼るか。葛上亭長を貼るの

あるとも。すべて火毒とはしるれバ。死ぬるをもこれを療すべし。蝮蛇に咬まるゝを治するハ別に一法あり。されバ山中などにて。獵師などのもちゆるところ。その法ハ咬れたるところを。煙管の大頭を以てかたく力を極ておしつけて手を放さずあつくなりて。肉腫ありて。火皿の中へ丸く満るときなんく。その處をきりやぶりて血を擠出てのち。鳥銃の火藥を喫せたる創口へおしこみ。丸く成る肉をとりまき。高く填て。それに火をつけ燃きとして。此法ハ瘭處を断截りしも便宜まで灼やきされバ。やくしてのちに雄黄硇砂などを傅るもよし。山かせハ血を擠る迹を小便にてあらひてのちに灸薬をとゞめて燃といふなり。これも又よし。又く霜柿串柿の類孔中乃蒂なるところを。醋に煮てよくつけ残を喫の。又もよく煎じて用るもよし。瘭を柿渋にて洗ひてもよし

【け】煙にむせて悶絶したるにハよく嚏薬を用てくさめをとり。萊菔のおろし汁を多く服べし。それにて解しかぬるときハ吐薬を用ひれバ黒く汚液を吐て愈るなり。又毒煙にむせたるにハ。桃仁を研たるを湯にてときて服べしといへり。油の毒を抱損ぶの効あり。すべて失火の煙にむせれ毒煙にあたれ悶絶して息出ざるを雷震死をいふぞく。まづ息のかよふやうにてのちに萊菔汁を用ふべし。されバ咽に降されバなり。やゝ軽き火瘡にハ萊菔汁を塗てよし。

▲煙にむせたらバ。そやく地にむかひて息を呵のけよといへり。すべて烟にまかれたる時。地に這バ命をたもつなり。そのうへ煙ハ上へのぼるものゝ故失火

みぐ。たとひ衣服に火がもえつくとも
ともちゐてその所を出るやうにして。
のがれ。のがれバ衣服の火ハ消しぬ。ぬ
ぎすべし。かく命ハ助るなり。このこ
とよくおぼえおくべし▲蚰蜒と煙
管の火皿にて打ころし。この煙管
なる煙草をのみて即死しけるもの
なり。これハ蚰蜒の毒と煙草の脂と
相合て。猛厲毒となるものとなる
またるし。のするときハよく油
をのむの吐剤を用ることあれど決し
て死ぬるまでつハいらぬものなり。これ
らを記得おくべきこと也▲毛蝨ハ陰毛
にも生ずるものなり。それにも軽粉を
髪の根へぬりつければ自然と死ぬる
ものなり。又ハ苦参を煎じて髪を
洗ふもよし。されど此髪にある陰を
まあせ蝨のごとくをゆるハちゆへなり
黴毒に因ものなれバ。毒を消して治
術を施べきものなり▲下疳瘡ハ陰茎
へ豆の如くなる瘡發するなりやがて彌
蔓て陰頭漸に腐蝕つひにハ缺落て
不具の人となるものなり揚屋などに
て身を慎なく黴毒ある妓などに
より毒をうつされ妄なる膏藥を雜と
なく貼て腐蝕さする起本となることあれ
されバのり齲旅よろく。その瘡發ぬる時ハ。
よく膿熟るをまちて鍼をさして
膿を出しそのあとへ蒲黄末をふりか
けおくべし。膏藥をつくれバ封て腐蝕
さするものなり。いづれにも内治の宜きを
得るにあらざれバよく毒を排除ことハ
為がたけれど此ハ行旅などにてさしあた
る悩を免しむるまでにいふのみ。
正しき治法ハあるべにまかすべし。また。
蒲黄に軽粉をすこし交て傳るもよし
▲毛ざれしらく。陰莖にすりきずのごとく
なりて。爛るにいたる。これも黴

毒あり。そのゑにあしくよごれハ。そのあとへ
ぬるより膿て下疳瘡の潰るゝがごとくに
なりそのあと腐蝕するありて。たちまち前に
いふところのけ薬をもちゆべし【毒】河豚魚の
毒ハ腸にのみあらず頭にもあり又一種肉中
にも毒のあるあれど形状まで漁人と
いへども是を別つことかたけれバ偶その
どくにあたりて即死するなり。よく
これを解するものハ油なりとさるものなり
となり。毒に中りたるときハ胡麻
油にてもいづれのものを一合ほど速に
のむべし。これにて大かたハ解するなり。
又吐薬を用て吐するもよし。人糞汁
よくその毒を解することいへど油の
効の速なるにハ及ざることその外にさま
ざま解毒の薬を古書に載られども
らバ効あるべしとおもはるゝものハなし。
故にこの編にハ挙ざること又此物の乾
あると喫くらふことなかれそのうち肯綮

く。立をはなれずしものにハかくしてあらハ
至毒のものの偶に混じたるを知ぞよしくに
そうひて毒にあたりたるおぼへべし。しかし
るときハ。白鯗を煎じてその汁を服
この蘘荷の生汁を服するがよし油を
用る速にはしらずして解すべし
多くばあり。▲ふくおもちとに方言に云ハ
黄胖のことハ前の糸乃絡痔疾條に
記すり▲注車船にハ硫黄の細末を内
服時へもつねにて上より糊にて紙にかう
おくべしといへども手いまだ試ず。すごく
酢そのむしといへり。又阿魏煎薬を
効いたるべれバ紫金錠萬金丹なども
よく用ひてしきれど船乗ふとる
なる身につけて百事にも成
といふハず。志あるものハつねにたつ
べきことなり▲踏ぬきハ釘または竹木の
るゐを足下より踏ぬくこそその殺なる
ものなり。あとくすりにて

らバ膿を醸ゆゑまよく〳〵なり出しきるを
てのち紙條の發燭へ油をひたしたるに火を
點し。油を創へたらしこみ。その上より粉
錫を臘と油にて練りたるをつけおくべし。
生鶏卵を油に和するをつくるも又よし
■重舌ハ舌の下に舌を重ねたるごとく
かく腫出して漸々に延ゆくへその中
にハ粘稠なる水まじり血と交へ。淡紅
色なる液が瀦くはるものへ。鈹鍼まく
バ小刀やうのものにて。皮を裂てそれ
をとれバそのまゝに愈るなり。口中に附藥
などハ不便利なるものなれバそれ近
きものあまたれど。硼砂二三分ずつのりに
枯礬五六釐をくハへたる細末をつけ
たるもよし。鉛糖の末もよし▲帯下ハ。
婦人の病なり白き粘稠液が通ずる也。
これに黄色なる臭気ある液を交へ
下ものハ男子の黴毒淋を患る者
と交接し黴毒を傳染され子宮の口に
瘡を生じたる膿をやすく〳〵出させ
なれバ。尋常の治法にてハ愈がたし
いづれのものもいれ旅中にてこの病が發れ
バ。歩行に艱むものゝその時ハ蛇床子。小茴
香。苦參。薏苡花の三味を各二三匁ほどとり
き湯に浸してあく毎々熨洗べし。
塩氣をへらし。膏梁臓味をとらざ
るべし。大麥。赤小豆などをくハふるな
らバ。それを用ひ内服劑ハ後のすの部
種の條に出たる。三輪神庫の劑を用
ひてよし。すべて黴毒より來るものにハ
何しても尋常の帶下ならバ小便通利
の劑を用ゆれバ愈ると速なるものなり。
これより小便淋瀝とて。尿口に痛を
おぼゆるものハ桃膠二匁に。甘草七分
とこれをせんじて用ゆる。このほか胡桃肉
を研り。沙糖をくハへあつき湯にとかして用
ゆるもよし。又。大麥を炒て。甘草
をくハへ煎じて用るもよし。▲凍死

あるものゝ息の絶たるハ溺死て水を呑たるものゝよりハ救やすし。外表ハ凍て氷乃如くに成りしも。些にても内に残る陽気のあれバ必活るもの也。されど周章てこれを焼火なとにて温んとするハ事理に昧きものゝなすところ却て救難となれバよく之を知るべし。之を救ふの法ハまづ凍死人を坐をおこして冷水を夥しく身體へ灌るべし。又ハ地を堀く頭面ばかりを地上に出し。土をうけ埋おきて久しくして一二時を過し掘出して撿バ。體の柔なるものハ必定活べき者なれバ[illegible]らの如雷震死の條に言がごとくにして救得べし。凍死せしものハ。息やゝ出たらバ。まづ生姜乃絞汁そのまゝをのまするがよし生姜をつき碎きを煎じて用るも又よし▲凍て手足の指痛をやむるにハいかになくあれバ。やけどのごとくなるもまのへそれハ馬糞を極熱湯にてとき。その中へ指を漬すこと半日ばかりすれバ素の如くなる也。又はじめにこれを防んとするにハ。白蠟六十匁に。胡麻油冬ハ二合夏ハ一合を火にてとかしたるへ片脳六十匁を煉あはせおく。それを手足にぬりつくべし。この藥ハ胼胝を治するにも用てよし。北國極寒の地にてハ寒気ごとに手足の指をおとすものも多けれバ。蝦夷の地などへおもむくものハ。豫て用意あるべしとなり。豫その患を禦んとならバ。日ごとに水を灌ぐがよし▲凍て皮肉潰爛したるハ樟脳を焼酒に融化る絞に入るに。石灰を入かきまぜたるものを清しくる上のちをとりて。布に漬して貼置べし。或ハ前のごまの油白蠟に片脳を和したるものを附るもよし。或ハ人尿もしくハ醋を温めてひたすもよし。又よし。まづ先の湯火傷に用る鶏卵と麻油とをまぜたるものを附る

もよし▲腰痛にハ。薤白を二ツ三ツに切て紙につゝミ。とじて挾べし。嚢に入ていゐる也**て**癲癇病ハ。旅の道つれにハともなハらぬと戒めり。實よこの病ハ不意にて發るものなれバ。山路船路などにても。病發る時ハ。おもひもよらぬ命をおとし。かゝることあれバ。心を用べきことなり。同行のもの。この病發したらバ。はやく冷水を面へ吹かけ。又ハ酢を口鼻へぬり。すこしのやすみところなどをさすれバ。覺ゆることもあるべし。嚔藥の用ひかたハ用るなどりつけよし。妄に内服剤ハ用べからず。もし藥を服せむとならバ。芎藭甘草各二匁を。水煎じて用べし。又阿魏といふて。いたつて臭き藥なり。これハ掌のうちにて温むれバ柔になるゆゑこれを丸じて。一次に五六分づゝのまするもよし。又ハ白芥子末一匁をこのりを湯にてときて用べし。このものゝ一味を丸となし。長服して癲癇を治したるものあり。百治効なきものにハ試用べし**あ**暑に中りたると云ハいふものも多くハ感冒にて。不養生なる人になるなり。夏月の暑ハ季候の正しき氣にて。妄に人にあたるものにあらず。されども慎むべき人ハ平常といへども。宿疾ある人と老人ハ虚なる故に暑熱に堪がたし。さらバ皆己が身を慎ざるものより起るとまで。暑氣にあたるなしといふにハ何ほど稀なれど。あたるときハ多くハ涼しき所に假寢して風をきゝあるとも暑邪なりといふなり。無益の香薷飲などいふ剤を用ゆれバ皆醫士のとりそこなへることあるが故よくこの差別を辨へし。暑月なりとも惡寒發熱。肩強頭痛などの症あるものハ。まづ汗をとるのくすりにて解する也

▲惡氣にあたりて氣絶し。なまに

ゆゑと心知がたきときハ。前の雷震死の治法よろしく救べし。薬物を多く蓄藏める室やくして密器に芳烈の品々納おきたる蓋をあけて入りたるまゝにさすみやかに其のおもてそれらハ。醋を頭面へ濺かけ。又ハ口中にもふくましめしきりに撫るものなり。よく心得べきことなり▲阿片おなじく阿芙蓉といふもの。麻痺と云。るときハ酒に酔て精神の乱るがごとく。又ハ眼口鼻などふさぎてものいふこともし。視ることも聴ことも心のまゝならぬやうになるのよくやうにて手足を揺り動くこともかなはらぬやうにさするもあるなり。効能のつよる薬なるが。その功能をよく辨知らざれハたとへバ毒ものなりて。用法いかにも巧者ならねバいたづらに害となるのみなり。病に益あり。この物を用ひれバ咳嗽ハたちまちにやみ。痛ハすみやかに軽くなり。睡眠のなきものハよくねむるがゆゑに。近来蘭家情あまた和蘭医者が一時の功をもとめて人を験し。後の妨害となることを顧ず用るがその中にハ睡て覚ず。又ハ眼昏て物の形かたちなくやうにて色目も覚ず。ふるへ。頭痛眩運耳鳴面赤く或ハ周身痒して堪がたく。惡しくハ精神錯乱譫語或ハ脉遅渋腰脚冷て。腹拘攣遂にハ卒中風の如くなりてそのまゝ死るものあり。かゝる證のあらはれたる物を用ゐる害なることを確に知ば。はやく吐せる剤を用ひて吐しめ鼻にハ嚏薬を吹こみてくさめをさせしむべし。吐薬ハ前の▯く外部霍乱の條に記せるをみるべし。嚏薬ハ▯らの納雷震死の條に擧たるをみて撰べし。醋と麝香よくこの毒を解すといへども麝香ハ近来偽雜多くして効少なれバ醋を多くのませるがよし。頭眩の軽きものにハ吐薬を用るまでもなかるべし。

めしを服すべし解毒する也り寶藥の
一粒金丹粒甲丹金匱救命丸なりと延利
世如の類いをのおもを主として製をし
方なれバその證とも難じして妄に
是を用ゆく毒は中すとも一ゆるあれバ毒
ゑとひへどもんぬおきく人を救へし。
吐薬を用ゆく吐さるものとなるぐく一下
をべきおしとも前にをそでいへるおぐく。
そりとけ阿片の毒などを解するには。
劇き下剤のよけれバ霍乱の條に載る
る。備急圓の類を用ゆるをよし▲少陽
魚の尾に毒あり。もし人これに觸れバ指
を損ふ。いへどもこれは毒のもとはなれバ。
此魚の尾をさきに至く細き刺の逆に
ありて。その刺が肉中へ螫入りて痛を爲して
腫るべし。この故に漁人もこの尾を多く切
断て輸るのこれは。鱝魚の皮と剝く。
まじく纏あげバ速にいゆるこれ漁夫
傳る所也**さ**酒に醉て昏冒となり
人事の省をもひなく聽く亂を失ひ
て卒中風の如くおなる事ありこれハ
多くハ痼證のやうでを卒厥の萌ある
の平常より頭痛昏眩などあるものに
發する證なく。此の飲酒を忌しき
ものなりと心得てその事におけバ必死
ぬるものなれバ。盬もとれを解するを
となすべしまづ鳥の羽に胡麻油をぬりて
のどのけ。咽をさぐりて探て吐を誘べし。
もしそれにて吐ざれバ瓜蒂散にても何
にても速に吐べきものを用て快く吐
さすべし肩項など強く壅塞すれ
バ必ず。急死おいその位く肩の肉を
へ撒やうに指の又へ鍼を刺て吸角だ
以て吸ひきるゆすらもよし。生気ついて
のちハ硝石大圓調胃承気湯などを
用て下をするよし。方ハ前に擧るを見
るべし。もし泥飲て。宿酒の殘るもの
なりと見れバ。雌黄二分ぞりを用るこの。

鼠李子二匁ほどを煎じて服べし。大に腐敗たるものを下して治するなり。▲疫下病とて血のふ足したるなり。黄色になる黄胖といふ病ありこれに用べき剤は前のちの部痔疾の條に出したり▲酒に返し灰といふものを用て敗壞て酸味を生じたる酒を直して酤ものありしこれを過飲ときハ。臓腑腸胃を害身體を疲し。諸液の運輸を妨く痲痺不遂の症を發するを。痛風あるひハ石淋といふて小便へ石を生ずる淋病などの原となるゆへ右のものゆゑに灰を用て製したる酒ハ。决して飲べからず。酒客の意を注て擇べきなり

き 金刃傷の小さなるものハ切るとおよやいなやそのまゝゆびさきにて切たる所を壓て血を出さず。手拭なりとも過せバかのきれを愈合て即に痊するものなり。創やゝ大なるものハ火爐の灰乃炭末と灰塊を添て創口に填て紮おくべし。これにて大かたハ血とゞまるなり。石灰ハよく血を止る効あるものなれバこれを以て血を止る藥をかねて製おくべし。その方生石灰の細末したるを鷄子白にて捏く日に乾して堅くなりたるを。再細末して蓄おくなり。凡創所大にして血出て止ざるものハ生石灰乃細末したるを水にかきたて其上清をとりて洗べし。もし石灰なきときハ常の灰汁を用てもよし。それもなけれバ冷水にてあらひて燒酒を用ひしを古代のをしへ。今ハそれを用る者ハすくなし。創をぬふことハ外科のわざのことなれど皮と皮の齟齬ぬやうに膝のあたりをきうよく縫ときハきしてむづかしきことにあらず。かゝる時ハ衣服をぬふ鍼を用ひ木綿糸にて縫

てもよろしきとなれバ。外科もなすまもなく

きと其はい。そのまゝはしばらく血をとめる

とれほどくみだく命危きとふきん

よりはやくぬひあはするがよし。されバ裏

縛をなほよくしそれバ。大体なる創ハ

ぬひバしらくきみの上木綿ハ白壺

呼ものを雨縁とよりへかたよりふきれ

て用ゆるも。猪ならる海人胡麻油をぬり

ゑむき。鎚としてとさきにたる木綿へ鶏子

白をつけてゆるべる。の魚膠の膏やく

または賣薬の即効紙にてもよし。

その上へ木綿のくるみたるを酢に

浸しくくり。それよりきつくしむる木綿

まですみやかなり。夏月ハ麻油をひきざ

るもよし。又ハ血のもし出しる脉

なども。三寸を過れバ愈がたきもの也

ものなれバ。とかく血のとまらぬ

やうにするのが血を止る第一なり

なれハ。揃苔なり上の硬き皮を去て

槌にてよく／＼と打て貯おきたるもよし。

綿にされて用るなり。次ハ楡茸を次。

馬勃とて。林下竹藪崖などの陰に

生ずるものにて。つぶれ又ハかたりぐさけといふ

ねを飲又裂て用ひてよし。これらの

ものはいづれも内服してもよく血を

止る効あれどもそれハいまだ試たることな

あれバ。もし内服するならバ細末して

冷水にて用るなり。金創の血乃大ニ濆

出るものハ動脈の太きものを切たる

なれバ。もし血出て止ざれバたちまち

死にいたるの故に。その脉管を引出し

て。糸にて紮り鐵を焼てあてふさ

ぐのなれバ。なかなかそれを素人にハ行

ふことなりがたし。旅行山中などにて

醫師もなきことなれバ。煙管の大頭なり

とも。火のりあへねとまつ赤にやきてこれ

にて血を止るがよきなるべし。いづれにも

気絶を以て。ぬぐひ血を止るやうにすべし

きとなり。▲灸のいたみハ内に籠るが
毒の外へ洩て病の愈んとするゆゑ
なれバ。これを厭て速に乾さんとするハ
灸をぬるハ劣するなり。故に橐吾の葉
この青木の葉ふるひを火にあぶりのべて
貼るの何ぞ膿を催べき膏薬をつけよ。
なくうみをとるべし▲菌の毒にあたり
たるハ人糞を服まバたちまちに解る
といへど。臭穢ものを用んよりハ油を
飲にハしかず。又大豆の汁。及び
土漿水なども此毒を解するものにハ
なれど。笑菌ハ大毒あるものなり。死
に瀕んとし蛇の口より流出たる
汚液の樹上より土に落し。即に生出
たる菌の玉蕈に似たるものを下毛の
野にて親しく見るものなり。これらを
誤りて喫ときハ忽毒にあたりて
即死もすべし。それぞれ毒と知らバ速に
吐出べきをとなすべし。吐ざりハ
霍乱の條にくはしくすゝむべし。楓樹に生
ずる笑菌雑木の朽株に生ずる雑
蕈。
縱に八丈島の人喫へバ必ず狼狽て
昇んとする異菌ありときゝおよべり。
菌ハ妄にくらふべからざるものなれバ。
猿などにハよくつゝしむべし。

ゆ 入浴後に頭眩昏倒するにハ冷水
を面へ吹かけ周身へも灌かけるハ
飲ましむるもよし。酢もまた効あり。さめて
後ならバ鬱月て快ならバ桂枝加龍
骨牡蠣湯を用ふべし。又方桂枝芍
薬龍骨牡蠣各八分大棗六分甘草
二分。六味合せて四匁に生姜二片をく
れ。水一合二勺を煎じて六勺とする
なり。

め 眼に塵砂などの入るハ。
筆の尖にてそをつまみて。眼中を拭べし。
また薄墨を點するもよし。指にて
いらふべからず。このへつくの恐あり。▲眼球
を打撲の激動に走出さするものと

ありたる時ハ突出したる眼球ハなたるよ睦をしのけ手巾を摺て両手の掌ニて眼球を按へ〻く。むかへ壓入べし。のちを冷水ニて洗て木綿を巾一寸あまりに裂き。頭後へあぶるして。このらく縛おくべし。又出んことをおそるゝ迄ハなり

み 水ニ落る者ハらバありあふ板箱竿なにゝても水ニ浮て攫るたよりになるべきものをはやく水中へ投て。この縋くまゝとのかけられべし。つよく力を用ゐバともに沈めがたし。のくそれバ身ハこのうゞバ水の上ニ浮出て溺死ぬることなし。人此體ハもとより胸肋の中ニ肺の臓といふ浮嚢あれバすこしいつのまる物なしともまたく。おそれのけバおのづから浮て。ちより上ハ水の上ニなるべきものなれど。周章るゆゑニ溺るゝ。犬猫などハ水ニ入てもおのれと游ぎするもおそれともせずニ落て死ぬと死なぬハ。たゞ心のおちつくとおちつかぬとなりよることなるぞ。よく〳〵心得べし。今の世此水馬なるもの有けり。人馬とも辛じく水を渉るハ馬の尾此鬣をとらふの頭をとりてゐる乃天質を損ゆゑ之。よくおちつくべきことなり。今水ニ溺てしなるものハよくその衣帯をとれ。裸體ニして両脚をとりて逆ニ引起して。両脚を肩へかけ溺てゐるものゝ腹を脊ニて按やうニふりし前へ屈て歩むなら。水を吐べし。もしこれを御ふして脚を前へ両く肩へのけ立たるすほしく。別ニ人ありて腹をつよくもまさく水を吐せるもよし。漢土人の牛の脊へのせて腹を牛の脊ニよく按せ。何のまきなかりし水を吐せるハ手おもしろし。便宜なれバ。くゞ倒ニ引立るバなかのものだに吐出さするのせ。

水をことごとく吐尽しなりとおぼえば。静かにして新浄衣をきせ。蒲團のうへに横に臥しめ先口を開き。土砂などの口内に有るものを手巾にてぬぐひとり水に浸し。指にまきつけてよく掃除し。鼻の中をもかくのごとくし紙にて喉をふさぐ。さて自身は嚏薬をさしてやるべし。夫より後の治法ハ雷震死の條に云所とおなじ。又嚏出る時ハ息出れば必蘇生するもの也。もしまた飲ませて胸腹の膨脹ぬものあらば水を吐するによろしからず。凍死溺死の類ハおそらく灸ハ必宜からど氣息の出ざるうちハ灸火の應あらざれバ益なし。氣息微に出て後にハ必灸して佳し。又これらの身體を按摩しさするにハ手塩を多くつけて。塩を肌膚へすり込むるやうに操べしといへり。されどもなによりすべてこれらハとりかけ仁愛の情を主として心を静めてかゝりこのひとを救べきとおもふやく治べき事ハ水中まで呼吸さへせねバなりと吞むあしきこと死ぬるものゝみなりとしらず。故にさきにも武士などハ此氣息を暫止て呼吸をぬかせど。平常修し習ふ不虞の用に備べし▲耳卒に腫痛にハ輕きと重きとの差別ありて。この輕きものハ周身の熱もさしてなし。耳邊ばかり熱ありて痛もさほどなきものあり。重きものハ耳の熱やくが如くにして。そのまはりの脈ひびくびくと動くが自己にも知られ。耳の中鳴躁しく痛も又はなはだしくゆゑのかゝらぬ強き病ハ一段進むときハ。讝語をいひ。直視昏夜眠ることもなくしてはげしく昼月睡て覚ざるなどの證續て起りきたるも。死生もはかり測りがたければそれらの危險

とゞまらぬならバはやく蛭を多く耳のまはりへつけて血を吸せ内服剤ハ大黄。消石。黄蘗各。山巵子五分を一貼とし。水煎して連に服すべし。又ハ調胃承気湯。涼膈散を用るよしなりそれより上の療術ハ至て世に時醫などのよく治をなすこと稀なれバ況て素人の為得べきことにあらねど。羈旅などするその患に罹し時の備とて。その一端を記しおくなり。耳の輪腫痛にハ樟脳を醋に入るまで熨す。の後よハ麻油と蝋と片脳を和するをぬりてよし。又ハ金銀花。苦薏花。小茴香等分に樟脳少しばかりに加へて。湯に温めゝむしたるがよし。重きも用ひてよし▲耳へ虫の入たるに。虫のこのむものを耳の輪へつけて寄せてその出るをまつべし。いつれも出ざる時ハ。唧筩を以て。微温湯を注込て耳の中にとゞくべし。[illegible]膜をつくく底のなきやうすれバ。耳を下へかたむけてこれをうかゞへバ。必出るなり。牽牛花葉。苦楝實などの虫を制する物を煎じて洗ふなどよし。又一法に棕櫚の毛のさきへ黐膠をつけて虫を鉤出すべしといへり。この法尤よし。又紙條のさきに油をつけて耳をさぐりて鉤出すべしといへり。これもよしんなりといふべし

志 食傷ハ多く常に消化のよろしからぬものを食して。一時におこる病なれバ。腸胃健にして消化のよきものハ偶に喫過しても。さまで腹の脹満するにもあらず。害とハなるべし。然れども毒ある物に當りたるにハあらず。稀ハ不養生なるもののなす病なり。その軽きものハ。前に出たる益智飲建中散などを用てよし。重きものハ。吐剤など用る。この下剤

用るがよし。前のく」の部霍乱の條を見合せてはやく治すべき也△呃逆ハ冷水を息をつかず一盃つゞけてのむべし。又ハ紙條を鼻へさし嚔をとるべし。ことにつのり昼夜出て止ざるハ霜柿又ハ串柿の中汁也。ゑふゑるところを喫。外の妙きにても生姜を加へ煎じて服るなり。柿蔕を薬舗にて売なりそれを二匁に丁子五六分づゝ加へて煎じ。生姜の搾汁を加へ用ゆるがよし。傷寒にて呃逆のあらしきハ下なくし参附を用る也差別あり。俗人にはわからぬひとゝきおごさなれバ此に論ざる也△舌を跌仆る激動に自咬て創つけ血出て止ざるをハ速に水をふくみて。いくたびとなくはき出して。洗ひのよくされバ血ハおのづから止るものぞ。その後に蒲黄の末。または枯礬の粉をふりかけおくべし。粉錫も又よし△舌頭を誤て齒断て切断るさへ續くあらバ。ふくを含てしばらく吐出す。醋を含ミくぐく吐出し。よく血の止るやうにして後鶏卵の中の薄皮をとりて舌頭をよく包て乱髪を焼て細末にしたるを蜜にてねりて上へぬるべし。麒麟血を細末してぬりてもよし。二三日にて全く愈るものなれバ手きるハ丈夫のものいのちのうばひ悪きものハくらふべからず。△舌よりまみしろゝく血の出ることあり。これハ多くハ頭瘡などの内攻したるなり。又ハ頭脳などの病に催なりてかくなるとて忽ちにしぬるとあり。はやく巧者の医士に任せて治術をうくべし△舌に瘡を生ずる證にハ種々重きの差別ありて治法も又さま〴〵なれども其中に

舌疽といふて。初ハ舌にかたまりある瘡が發てそれが膿て陷なり漸にひろがりゆく。これのぶるし腐蝕となれハ。飲食することもなりがたくして遂には死にいたる至して險證なり故にはやくその腐蝕を止ることをえざれバ。そのぬとハいふまでもなけれど此證を發するものハそれ以前より心意舒暢ならず面色萎黄腰脚冷脉ハ沈て力なくなどして陰氣なる人に多き病なり。これを和蘭醫者などハ巧に病因を説てきく人の耳をおどろかせども此治術にいたつてハ迂遠にして救得ることすくなく。後世醫師ハもとより鈍く確保ることもなく吉益派などの下剤をもちいて先々まで治をき病なりといへども。されバこの病に追附あるべく多くハ死にいたるものなりとより試るべし鬱毒あるうへに身體疲倦氣血の運行遅澁なりて起る病故。初より參附の大剤を主として毒を消すを兼て治術をなさざれバ救ひがたけれど。參附ハ燥衝をなし。毒の勢を長ぜしむるなどとて。和蘭醫輩などのいふをも信ず。遂に不治にいたらしむることを多し。すべて疽とハ。表へハあらハれず腫もなくして肉中に深く弥蔓しておそきにいふの稱なれバいづれも虚寒に生ずるものぞ。和蘭醫師の口癖にいふ焮衝といふものハ腫瘍別なる故に俗家ハよくこれらのことをよく記得おきて醫師の巧言に誑さるゝことなかるべし

▲傷寒と時疫癘などいふ稱ハ各別なるやうなれどもとハひとしく且世にいふかぜ風の感冒といふものも實ハ傷寒の輕きものにて輕重に拘らず頭痛惡寒發熱の表證あるものハ必ず汗をとるべし。汗を發剤ハさまざまあれど羈旅在陣など

にハ盡く之を用ゐる故なれバ。前に出せる建中散と熱湯よりさきに用て。汗をとるべし。汗を發さバ米の粥を稀して用ゐるこの温飩。羹。蕎麥。鷄卵湯。酒客ハ生姜味噌の酒などを飲てよし。我邦のむかし風ひきたるにハ必腰湯をつかひて汗を發させをかしこへ行て これをゆぞといひしを古き物語にみえたり。旅中にてハなかなかその薬を用んよりハ此ゆぞの法を行ひて汗をとるとハ薬にもまさる効あるものなり。柚の皮。香橙皮。蜜柑の皮などを煎じて用るも又よく汗を發さするもの也。近來の和蘭醫者が妄に焮衝といふことを唱へ。傷寒最初の必汗をとるべき病者に。蛭をつけ絡を刺などして血をとる。下剤を用ゐて下しなどして壊證になるをまゝ見る。雜病とちがひ傷寒。時疫の病ハ。汗をとるべきものを下し。下すべきものに参附を用ひ。参附を用べきものに下剤をもちゆるなどすれバ。わづかに二三貼の薬にて人を殺にいたる。怖しきものなれバ俗人もその心得あるべきなり。況て旅中にてハ病に遇バ。妄なることをせんよりハ薬を用ずして。その動静を旁觀すべし。すべて人の體にハ自然受用力といふものありて病を排除する機關あるものなれバかくの義なり。あるべし。▲白癜風にハ。青胡桃を生のまゝきざみ擦などぬりつくれバ。膿を醸て愈るがゆゑに。毒の内攻せることなし。用ゆるにハ。青胡桃一个に巴豆二粒を研合せてつくるハ。なほもよし。

ひ 肥前瘡ハそのむかし異國人が肥前の州の長崎にて娼婦に流傳し。それよりひろまりたる一種の毒なるといふ。延利時代に。黴毒と

筑前の博多にも異国人よりうつしたるを以て。呼で唐瘡といふなりとぞ。これらの病ハおほく一種のどくにして。人より人につたへうつりたるものなり。是このむるを臆測なる病因をとなへて。的當の治術をせざるもの少からず有。治しかぬるなり。ゆゑに今その病毒の人より人へうつりて孫蔓ゆくことは。たとへば草木の種子を蒔に。初ハ一分根して繁茂せしものと一般なることを須辨して。その傳染を御ぎ轉ずる初においてよくこれを排除することをなすべし。羇旅の客店などにおいて枕席などよりうつるものなれバ。よし嬖妓などよりて。指の間などに二ツ三ツも發るゝハ。早く鍼か刀子などにて刺破りて。血をしぼり出してのちに硫黄の細末をつくべし。その時乃硫黄ハ發燭に用るをけづりとりてもよし。藥舗あるところならバ。鷄の目雁鵰の目と呼ところのものゝ細末を買て貼るがよし。礦硫黄の世に金硫黄とよぶもの一匁に片腦三分硇砂一分をくはへて。細末にしたるものを貼るもまたよく効あり。その毒をして蔓延て。肘臂におよびたらバ。一日に血をおほく出しなバ。そのうへにてその跡をつくるなれバ。よくその處を消除をなせバ。くらうらく驗をえることあり。ことに蠟のけぶりよくこの毒を消しつくしてとくに妙なるものなり。いかなど周身にはびこりたるものも。日々蠟を煮てその烟をあてて患所をいぶせバ。いつのまにかいえて。内攻することもなく。治するもの

なり。ゆゑに蠟燭を多く製る家多くハ肥前瘡にかゝるものをいとへり。これらハ物類の相感のしからしむる至て妙なるものなり。ゆゑに硫黄ハよく肥前瘡のどくを制し。これを排除の効あることなし。諸薬その右に出るものハなし。硫黄に。鶏の目鷹の目とよぶものを上品とす。これを細末して。日に二匁ほどづゝ服するときハ。ひさしかれバ。熱気に硫黄の臭気を発し。大便微利。小便も硫黄のにほひをなす。およそこのごとく百日ばかりも用ゐれどもくるしからざれバ。毒ハとくのぞくなり。近世火薬に用ゐるに。此ものを製して精粋なるものをとりたるを。硫黄華といふ商家にハおほくハ發燭に用ゐるものを減て。これをきんするハよろしからず。えらびて用べし。内服にハ此硫黄花を用るをむねとす。肥前瘡内鬱して。水腫を發することあり。あしきハ衝心するものあり。小便つうじがたく。水腫を發しぬるハ後の[illegible]「の部水腫の條にいふところの法に從ふべし。衝心するものハ前の「かの條の脚気の衝心と異なる事」なし。肥前瘡内攻して心腹の病となり。或ハ眼病となり又ハ変して腰あしの病とならざるものハ年久しく皮膚の間に浸淫て癢どあるものあるハ。日々水を灌きおこたらざれバ。その毒をさそひて外表へ發して膿を釀して治するなり。この一段にいたりてハ世人の卒にあわてて駭ところなり。此治療をして唐醫鼠輩のよく知ところにあらね。故に此に論ぜざるなり。▲砒霜の毒にハ胡麻油にても燈油にてもよく

用ゆれバ解す。明礬二分ばかりを細末して冷水にて服すべし。これも毒を解するものなり▲人にかまれて咬まるゝ也。同類として慢視しがたきところのもの也。もし血出て痛あるへぶくバ。そやく小便をそゝぎかけながら洗ふよし。やゝさらて小便を器にとりて。その中へゆびさしいれ浸おき血のとまりたる後に。冷水にてよく洗ひ。發燭か紙撚に油をつけたるに火を點じ。創口に滴しこむか又ハ灸を六七壮するもよし

も 粢餻の類の咽に噎て下らざるときに。ごまの油を二三勺服ばそのまゝ下るなり。又ハきつき醋を鼻へ吹こむか。服するもよし。薺苨の自然汁もやはりよし

せ 疝氣にハ菩提子の根を煎じて用ゆ。これを疝氣の一服茶と云ふ。一ぷくのめバ効ありといふ。賣薬にもあるあり。ゆゑに馬蓼の茎并に葉を乾して剉煎してのむるも効あり。またハ唐の苦楝子 小茴香 唐木香を等分にしてそれに川穀根を倍加して疝氣の妙薬なりといひて鬻ものありこれらハ尋常の醫者の藥よりまさりたる効のあるもの也。川穀根馬蓼などハなくてあるもよし。あれども此ハ臨てハ得がたきこともあれバかの宿疾あるものゝ常に用意しておくもよし。又ハ前の建中散なども疝氣を治する効あれバ。それにてもよし。せんきにて陰囊にものゝはれたるにハ。小茴香を細末して多く服すれバ効あるもの也

▲燒酎を飲て解がたきときハつよき醋を多く呑べし。もし毒にあたりて面色青くなり。牙關をするものハすみやかに咽をさぐりて

吐かまたハくだしぐすりを用るがよし。またやくいんのさ湯ふ浴が解そるといへり。せうちうにて呑べし。あまり多く飲ときハ。卒死する者有と云り、

す

寸白と俗にいふハもと長さ寸ばかりなる色白き虫のことなると絛虫といふハ長虫とよぶものゝ一種ごとく長くそのうち真田紐に似たるをあげつらふ。これをさなだむしといへりのちハ寸白の虫といひ小腹より腰脚へひきつりていたむものゝ。やまひの虫ハ通ずるよりうかりて病の通おほとなりしせ。その繞實ふこのむしハ腸中ふ生ずるよりおほすつるものにあり。長いの虫をはくものゝ五六尺ゆきハ一丈おすりも遍ばかるを引きりあるゝ。その残るハ紀ぜしく延るもくるのとちえて先後十餘丈乃至二十丈餘も連じたるありのいのちこの虫を治さんにハ。飲食を断て榧の實一品を三次の食にかへて。七日が間食すれバ虫このうち死して下ること妙なり。ぬりで鮴魚とて鉦鯛のごときむしまくみかしくさるくしめ。悪をあざそのものもこのやの実をとへバあとくだりくわりまくのゆる者あり。ず。阿魏といへるくさき臭氣のあるものあり。これも虫に効ある物なり。これハ藤黄を十分一くはへてひさしく用ゆれバよく虫をけしそえ。ず。前の疝氣の藥に。草烏頭を一貼に七八分つゝくはへ漫火にてせつて濃煎にして用ゆれバよく一時の苦惱を治するものなり。ゆき薤白を味噌をつけ。火に炙てくらふも効あり

▲擦傷にハ魚膠膏をつけてよし。その方ハ安息香三十匁を細末し。

く。焼酎に二日ほどつけおき滓を
去りさて。魚膠百匁に。水一升ほ
ど入よく煮て。五合ほどに成たる
とき。安息香の焼酎を加へかきまぜ
て膠飴のごとくなるまで煮つめる。
火よりおろし。細布にてこし絹にのべて
貯おくなり。これを略して水透膠
といふものなり。又入煮とのしたる
を。紙にのべたるを即功紙といふて
うすきものゝのりしの如くつくものには用べ
し。この魚膠膏は。擦破られ。創金刃
傷の浅きもの肉刺などにも用ひ
らるべし。且唾をもてうるほしつく
貼るのみにて捷便なれば旅行
兵などもふところに納て
よきものなり。即効紙の
火るゝには。黄蘗を煎じて入る

救急
前
救急撮要方

撮要方拾遺　嗣刻
編に洩たることゞもを悉く記しあり

〃摘方前編　中本一冊刊行
やけど湯やけど打身きり疵鉄炮きず
疵一切急病の救ひのこと骨のつぎ方
までいづれも素人に會得やすき
やうにくはしく圖を出して示せ
書なり

同後編　同刊
朝夕に用る水のゑらびかた濁り
水をすます仕方熱病痢病其外
安き病のふせぎかたのこと蝦夷などの
地にゆきて寒さをふせぐべき仕方
鉄炮疵のうちこまれたるを治する法一切の
急病をすくふこと殊に詳にあらはし
たり前後一帙となしたる本なり
大本一冊刊行

厩馬新論
するものなれば中々のことに浮てをる
べき獣なれども仕立のこと悪しき故に
當世の乘馬すべて軍用に立がたし
ことを論じいかなる困窮の士にても
費少くしてこれを飼るべき仕方其
詳にしてまた馬の病を察する目
きゝをまでくはしくしるしたり

日本開闢由来記　繪入よみ本七冊
日本ハ世界第一の国なる由来を
古書によりて詳に記しやまとだ
ましひを引起さしむる書なり

鑊居堂藏書

ぢし　二十